

昭和 49 年 度

高槻市文化財年報

高槻市教育委員会

はじめに

本市は古くから文化の栄えた地であり、わが国の文化・歴史の理解に欠くことのできない文化財が豊富に残されております。これらの貴重な文化財は近年の急速な都市化によって開発と破壊の危険にさらされながらも今なおその姿をとどめております。この貴重な文化遺産を永く保存し、後世に伝えることはわたしたちに課せられた責務であります。

このようなことから、本市は昭和44年10月に文化財保護条例を制定し、その保存・保護につとめておりますが、その一環として、昭和47年度より建造物1件(昭和47年度)、古文書3件、民俗資料1件(昭和48年度)を市指定文化財に指定し、その保存につとめてまいりました。さらに本年度は美術工芸、建造物、天然記念物等の各部門において基本調査を実施し、その資料化を図っております。また、今年度は待望の仮称埋蔵文化財調査センターの新築工事が着工され昭和50年9月末に完成予定であります。

この文化財年報は、昭和49年度に実施した各調査の概略をまとめたものです。今後の文化財保護の指針として活用いただければ幸いと存じます。

なお、この文化財年報の刊行にあたり、ご協力をいただいたかたがたに厚くお礼申しあげます。

昭和50年3月

高槻市教育委員会

社会教育課長 橋長 勉

目次

I 文化財の調査	1
1. 建造物	1
2. 美術工芸	3
3. 古文書	4
4. 天然記念物	4
5. 埋蔵文化財	12
II 高槻市立仮称埋蔵文化財調査センター概要	20
III 高槻市文化財一覧	21
IV 図 版	
PL 1 清福寺太子堂・正徳寺	
PL 2 妙楽寺・神宮寺	
PL 3 原峠の化石層	
PL 4 原峠の化石層	
PL 5 道鶴町淀川河川敷のヨシ	
PL 6 道鶴町淀川河川敷のヨシ	
PL 7 市内調査位置図	
PL 8 市内調査位置図	
PL 9 塚原古墳群	
PL 10 塚脇古墳群	
PL 11 塚脇古墳群	
PL 12 奥坂古墳群・嶋上郡衙跡	
PL 13 嶋上郡衙跡	
PL 14 嶋上郡衙跡	
PL 15 嶋上郡衙跡	
PL 16 嶋上郡衙跡	
PL 17 嶋上郡衙跡	
PL 18 宮田遺跡	
PL 19 宮田遺跡	
PL 20 天川遺跡	



1 文化財の調査

1. 建造物

所在地 高梁市清福寺町

名称 清福寺太子堂

清福寺は旧芥川村に所属し、阿久刀神社の東南、芥川の流に近く位置した農村集落であった。この近年における農地の宅地化によって新築の住宅群で周辺が埋められ、かつての景観は大きく変化している。旧集落のほぼ中心に位置を占めて観音堂（公民館）が建ち、それに接して小広場がある。この広場の奥に東面して小さな仏堂かひつせりとたっている。

この小堂が今回の調査の対象である太子堂である。規模は一边が約2.35mの正方形平面で、柱間は正面1間、他の三辺は2間、正面のみ両側及び前後戸を装置した戸口をそなえ、南側面東寄りに内開き板戸をそなえる他は、南西・北三面は土壁で閉ざしている。柱は面取角柱で石七台上に立ち、地長厚を四方にまわし、正面をのこす三厘の内法長押をまわす。正面では柱間中間をつないで虹梁仕立の指鳴居を通して、その下端に軸穴を穿ち機軸戸軸上部を取付け、戸軸下部は蓋産でうけている。各柱頂部を縄形被檜木鼻をもつ須賀でむすび、柱天に出斗を組み互角を支える。軒は一重葉垂木で、頂部で強く反り上げている。屋根は本瓦葺・宝形造りで、頂部に懸輪を据え、宝珠模飾りを置く。隅り棟の先端を鬼瓦で飾るが、その側面に「文化大造」の刻銘が読みとれる。

室内は板敷で奥に寄せて奥行0.65mの仏壇をつくる。左右脇部の仏壇前縁位置で壁に沿って柱を立ちあげ、柱天に出斗組をすえ、実材木で天井縁を支える。さらに、虹梁をこの側柱間にかかわらし、梁中間に平上斗を組み天井縁の中間支点をつくり、桁長間の小壁を笠装につくり、仏壇の外内を仕切っている。仏壇前面の外縁は神柱天井につくる。仏壇後壁中央に花壇口をかまえ、その奥、堂背壁より後方へ突出して釣仏壇をつくり、そこに春日厨子を安置している。厨子内部には御徳太子少童像（木彫・彩色）が奉安されている。

さて、この太子堂の建立由緒や年代についてはこれまで世間に紹介されることがなかった。今回の調査で入手した資料とあわせて紹介しておきたい。清福寺集落は江戸時代において村びとたちが大工職人技術者の集団からなり、いわゆる大工村であったことを伝えている。畿内および近江の六ヶ国の大工・船・木挽職人は幕府京都御大工頭中井氏の支配に属し、海所・幕府関係の幾多の作事に協役として奉

仕する義務を課せられ、その居住する地域毎に大工組が編成されていた。大工町北部と兵庫県東部の大工職人は既府十組大工として組織されていたが、その十組は清福寺組・福井組・小野原組・岸部組・池田組・勝部組・伊丹組・尾崎組・神池組・小坂組からなり、最終的に清福寺組が十組のうちの一組であった。清福寺組に関する古記録は今日まで既府十組関係資料に散見するだけに止まり、その実情を知ることはむづかしい。今回の清福寺町の古集落がかつての清福寺組大工たちの本拠であったことを立証する資料は現在まで知られていなかった。今回の調査において清福寺太子堂の建立由緒と年代を知る資料として同堂棟札が現存していることが判明した。即ち、同地居住の寺田銀造氏が保管されており、かつて堂屋根を修理されたときに屋根裏より取出されたもので、縦0.721m、巾0.206m、厚0.09m、鉤つきの大きさをもち、その表と裏二面にわたって銘文を墨書している。棟札に記された内容は、まず「表」面では天下奉平・五穀成就・城主長久・村内繁昌のために、御徳太子を納めたてまつる堂を建立すること、そして明和二年（1765）西十一月十五日に上棟したことを明らかにする。（註）次に建立関係者として世肥人六太助門を筆頭に「大工棟梁村中」10名、「村惣大工」6名、「大工若中」5名を上段2列に記し、下段2列に「村惣若中」20名の名前を列挙している。また、「裏」面では建立の趣旨として、芥川村清福寺五社神明境内に往昔より小社の跡に、一間四面の太子堂を此處建立したことを記し、寺社御奉行（註）、芥川村庄頭（註）、大工棟頭（註）と年寄（註）そして清福寺年行司（註）を四段に分けて名前を列挙している。この文面から知られることは、寺本氏の語では堂が現在残っている位置は当初からではなく、後世に移動されているということを知ることができ、五社神明社は今日では阿久刀神社境内に祀祀されており現存していないが、旧地は集落の西端に所在していたので、その境内の小社跡に建立された太子堂は現在地へ後世に移動されていることが知られる。太子堂の建立棟主は大工職人と村百姓の両者から構成されるが、大工たちの連名が上段に記されていることは棟主の主体が大工たちであったろう。そして大工の入数が20名で村百姓入数20名を上回っていることも異例である。なか、これらの人たちは広く芥川村に居住していたことはたしかであるが、清福寺集落に限定してよいかどうか疑問もたれる。芥川村民であって村百姓の場合には20名という数はすくないようで、一部の賢者にかきられたのであろう。しかし、大工入数の場合は当時の農村一般例では多人数であり、村内に大工集団が存在したことを明白に物語っている。これらの大工職人たちは惣大工と

呼ばれる指導者と平均的な大工棟梁たち、そしてそれ以下の若者たちのグループに分れていた。しかし、大工組の組織においては組頭と年寄がなる役職者があり、組頭は惣大工のうちから、年寄は大工棟梁のうちから選出されている。

次に、大工職人と聖徳太子の関係について付言すると、聖徳太子は大工職人にとってその業種の始原神にあがめられた存在であり、大工仕事の繁栄を祈願し、職人たちの結束を固める象徴的存在として信仰されていた。東京都中の大工二十組仲間では毎年2月と3月の22日の両日に定例寄合が開催され、惣組の総会と費用勘定が行われており、この寄合を太子講と呼んでいた。寄合内容では既に實質したものにしているが、寄合の名称・定例開催日を太子の正忌日または月忌日にあてているところに、寄合の発生が大工仲間太子信仰にもつづいたのもであったことを思わせる。このような京都大工組における太子信仰の変質と形態化に比較すると、清福寺組では太子のための堂が造立されており、その組仲間による太子信仰は持続され、一層強化されていると云える。これは京都のよな都市を職域とする大工たちと農村や宅地を職域とする清福寺組の大工たちの条件の相違がその組織の面に大きく影響していることを示している。

大工組の組織が幕府の消滅によって解体され、近代とくに戦後の改革の進行は都市近郊農村を大きく変貌させた。清福寺集落もまた例外ではなく、かつての集落の歴史は人々の記憶のなまけてはるかに遠い存在になってしまった。その由緒や歴史は見失われているが、集落のなかに太子堂はなおその姿をとどめており、毎年の太子の正忌日には供養が住民によって持続されている事例に注目したい。

(註) 伊丹市福地居住の松澤久一郎氏所蔵文書のうち、明和2年3月17日の覚書に、同日清福寺大工組・頭と年寄が清福寺行に一間四面の太子堂建立のために、清福寺組大工衆へ奉加寄進を依頼のために清福寺・頭を訪問した記事がみえ、堂造立経費の調達は村内だけでなく、広く摂津國の大工組々にも募金したことが知られる。

かり、それ以後は真宗に帰入し道場転じたと言う。江戸時代の寛文6年(1666)2月に従来の山号を廃し、寺名も正徳寺に改称され、今日にいたっている。

境内には表門・本堂・除霊・人形塚が存在するが、庫裏が改築された機会に本堂の修理を予定されていて、本堂の調査を市教育委員会へ依頼されたので、今回の調査を実施した。本堂は元禄14年(1701)に旧堂を改築したものであり、その事情を記した新禮札ののこされていることとであったが、所在不明のため今回は調査できなかった。

本堂規模は桁行9間、梁行6間、妻入り壁障手葺(トタン板で覆う)入母屋造り、四方に本瓦葺の下駄庇をまわしている。正面1間通りを柱間突き放しの広縁(神縁天井)とし、両側面に雨縁をそええ、正・側三面に縁柱をたてている。正面中央に昇降階をそええが、向拝をつくらない。

室内は正面5間、奥行5間を外陣とし、そのうち、両側より1間内へ入込んだ位置に桁行方向に丸柱列と小壁で中央間と左右脇間の3室に仕切られる。外陣の正面と両側の三方縁境は1間毎に柱がたち、各柱間とも2枚のガラス障子に変わっているが、当初は数戸であったという。外陣中央間の奥正面に内陣がつくられ、内外陣境の柱間3間はともに上部に彩色彫刻欄間、その下方に双折瀬戸障子を設置する。外陣左右脇間の奥は余間につくられるが、この余間と外陣の境仕切の位置は内陣と外陣中央間の境仕切位置より隔半分後退している。この境仕切の境退いは内陣を後世に前方へ隔半分拡張したことによる。内陣は正面3間、奥行2間半と奥は拭版敷で外陣より一段高い段間となり、神縁天井に仕上げる。内陣中央後方に寄せて来迎柱が建ち、その前面に須弥壇を築き、雲形欄子を安置し、本尊阿弥陀如来(木像)を祀る。来迎壇の背後、内陣背面側柱間中央1間は現在2枚の引違障子立になっているが、当初は板壁で囲まされていた。この背面戸口の左右各1間は輪仏壇につくる。この輪仏壇も後世の改築によるもので、来迎柱にのこる仕口廻りから推定すると、来迎壇の位置まで輪仏壇が造出し、また左右脇仏壇とならんで来迎柱間の中央間もまた奥行間半の仏壇につくられていたらしい。現状における須弥壇は後補のものであり、須弥壇を新造して、本尊仏を安置するような変更が後世に行われて現状が出現したことが判明する。内陣の外陣への拡張も同時の変更で、須弥壇を築きつけたことで、須弥壇前方のスペースを拡張することが必要になったためであろう。内陣左右の両余間のうち、北余間は造間。南余間は内陣と河川床溝をそええ、いづれも、小壁・三木膚建具で閉仕切られる。南余間は現状では背壁に輪仏壇をそええが、この背壁・輪仏壇ともに後世に変更されたもので、当初は内陣の背面側に通りにそ

所在地 高槻市西面

名称 正徳寺(真宗西本願寺派)

旧西室村集落のはずれに所在する。寺域「波瀾山園徳寺集代系図」によると、当寺は行基の開基(伝え、〇高野山米寺に親し真言宗寺院であった。室町時代(長享頃(1487-89)に当時の住持が遠祖北人に帰依し、明徳6年(1497)7月18日に徳知が当地を訪れた折に、六字の号名をふすからしたためて住持了尊に与えた。その後永正3年(1506)3月8日に寛如上人から六字名号をさす

ろえて開仕切建具がたなり、六畳数の座敷であった。この旧六畳の南についで六畳座敷があり、この旧六畳をあわせたかつて書院と呼んでいた。

当本堂は元禄14年に造立され、今日までの間に内陣まわりが改造されたが、外観・内部ともに古い形式をとどめており、農村集落内に立地して、真宗寺院の本堂化する以前の造地形式を良くのこしているものとして注目される。また、近世における3間梁の規制をうけた寺院本堂のとるべき姿として、梁行3間の舟倉を中核とし四方に1間半の五垂下座庇(当時の仕様では「しころ庇」と呼んでいる)をつけて足して構成される堂形式を当本堂の外観に良くのこしている。なお、内陣須弥壇上方四隅の天井縁に滑車がつけられており、洪水の際に浸水の被害から本尊仏を守るため、須弥壇とも上方へ引揚げるための装置であると伝えられている。度川に近く、しばしば洪水に襲われた経験から生れた水難除けの工夫がうかがえ興味深い。

表門は東區門形式で、本棟と母棟の各鬼瓦の繋ぎに「空曆四戊六月下旬、瓦師西五百住村源兵衛」とあり、宝暦4年(1754)の造立と考えられ、本堂より約半世紀おくれる。

本堂内陣の脇仏間に安置されている親鸞上人画像は裏面に「釈良如、正保二歳酉九月、撰阿闍梨西面都敬造通、本願寺真實上人真影」と記される。また、南余間の仏間に安置される善如上人画像は同様に裏面に「善如上人真影、釈良如(花押)、慶安四年^{享保}十二月二六日、撰繪國島上郡西面村正徳寺」と記入されるが、この墨書部分は表裏を改めたとくに切替りされている。

2. 美術工芸

所在地	高槻市大字杉生
所有者	高槻市大字杉生 妙楽寺
名称	木造十一面観音立像 一軀
像高	1.297 m
要 要	

頭上に十一面(うち6面欠失)をつけ、左手偃臂して持物(欠失)を執り、右手垂下。線香を懸け、裳をつけて立つ十一面観音の立像である。彫りが浅く、穏やかな表現をみせているところから、鎌倉時代末期12世紀の作とみられる。作風は当時の中央作すなわち京都風に近いが、丹波地方に多い髹漆彫刻と一趣違ふものを感じられ、本寺が奥郡と境を接する高槻市の東北辺に位置している点からこのことが推察される。

ヒノキ材寄木造で、内側、華笏を施す。構造は頭体を1材で造って、三通下で上下に割り刻き、頸部は耳後ろの

位置で前後に割り刻き、後頭部に小楠材1を加える。体部の背面は、左右を材を寄せ、方は肩・肘・手首、右は肩・手首でそれぞれ刻き、右肩外には小3材を寄せる。

保存状況は、左肘より先、右肘先、左裾外側部、両足先(足柄を含む)などが後補で、現状は全般に刻目が弛み、一部は解体状況にある。明治29年の山崩れて、堂宇と共に破損し、その後修理を行っていないという。

所在地	高槻市大字田能
所有者	高槻市大字田能 神宮寺
名称	木造大日如来坐像 一軀
像高	0.955 m
要 要	

神宮寺は現在廃墟の状況にあるが、像は本堂(高麗)の横手の壁に安置されている。横臂、膝前で足印を貼る動感界の大日如来坐像で、寄木造内彫、形眼、赤冠、作風はやや硬いが、鎌倉時代末期12世紀の作とみられる。

構造は、頭体前後2材を耳後ろの位置で刻き、三通下で上下に割り刻き、華笏に三角材を寄せる。肩・肘・手首で刻き、両足部は横木1材、裳先を別に寄せる。

昭和35年に全面修理を施しているが保存状況はよい。本体は両手首先・裳先部および宝髻一部・大粒台正面・白毫・冠帯などいずれも後補。下顎部から地付に及び前面材新補。光背・台坐後補。

(神宮寺は近く現在の位置から少し南へ新築移転される予定である)

所在地	高槻市富仙寺
所有者	高槻市富仙寺 富仙寺
名称	木造毘沙門天立像(本堂安置)1軀
像高	(雪頂一羽伝) 1.188 m

左手に宝塔を持ち、右手に杖を執り、邪鬼を踏む平等舟大の毘沙門天像で、寄木造内彫、形眼、慈和な彫刻がそなえ、正統属する彫像で、鎌倉時代後期の作とみられる。

構造はかなり細かい木寄せにより、本体は、頭体の前面を1材で造り、肩で割り刻き、後頭部と体部背面とに各別材を当て、両足は前後2材で造って体部へ差し込む。両肩、両手首で刻き、髻、衣右側など小楠材が多い。邪鬼は漆例のように内彫がなく、頭体と右側の大部分を含めて1材で彫成、小片5羽を寄せる。

保存状況は、本体の右膝部外側、両天衣裾部、邪鬼の左足先、左膝先、右膝部外側および台座のすべてが後補であるが、全般に彫削部分がよく揃っている。寄木はほとんど弛み、彫削のずれがあるので緊急に修理を要する。

3. 古文書

所在地 高槻市西真上1丁目1-1-3

所有者 中村學造

中世末期の史料で内容は「摂津国真上村田地注文」真本の写本である。(江戸初期の写本)

4. 天然記念物

原時に露出する化石層

所在地 高槻市原

概 要

枚方島岡線バス道路を北上し、東側に安岡寺4丁目、西側に松ヶ丘団地住宅のはずれが原時で、市バス停留所がある。この時のバス道路面は海抜120mである。北方は下り坂となり、右折し東条を経て田能、島岡市に通ずる要路となり、東側は安岡寺4丁目の住宅地に入り、西側の下り坂道は西北に曲って原下条橋及び摂津峡大橋に通ずる。この時の東北部の山地と、その西側には道路沿いに、造成で削られた地層がはつきり露出して見られる。この地層は高槻層と命名されたが、京大の上治寅次郎博士は未だ調査研究が不充分であるといわれている。茨木市の大坂層群下部に当る茨木層に対比するところがある。これは海産貝化石の出土から見られる。又、わずかにあるが、地層化石から山崎の城跡、乙訓郡に於いては、ある。 (第1表)

古い年月の部は、各地層については先人学術の研究に由る常識により、各自命名されているので甚だ複雑である。将来の研究のために充分でないが、淀川水系水域の西部を中心として丘陵地帯の更新世一帯新位である地層の対比図を必ずしも示す次の如くである。(第2表)

この地層のあるところ、古くより人間の住む処となり生活の地帯と出来た。商業して隆盛よく、故く平地には淀川水系が流れて魚貝類の漁業も多く、地味豊かで平地は豊穡文化が出来た。従って平地より丘陵地帯までは遺跡地が多量産出である。

わずかな日数の調査であるが、原時の化石層の出土化石は次の如くである。

1. *Scutus scapha* (GEMLIN) = *Scutus sinensis* (BLAINVILLE) ナメコガイ
2. *Phaladidea* (*Penitella*) *Pemita* (CONRAD) カメメガイ
3. *Gastropoda chaena grandis* (DESHAYES) コツガイ (楕管)?
4. *Ostrea* (*crassostrea*) *gigas* TOWNSEND MEGANE
5. *Ostrea* (*crassostrea*) *nippona* SEKI

イワガキ

6. *Ostrea* (*crassostrea*) *vivularis* (GOULD) スミノエガキ
7. *Anomia* *lischkei* DAUTZENBERG et FISCHER ナミツガレツ
8. *Aadara* (*Tegillarca*) *granosa bisenensis* SCHENCK et REINHART ハイガイ
9. *Bitium* *craticulatum* GOULD クシカネモリ
10. *Tonna* *perdix* (LINNAEUS) クスラガイ
等二枚貝8種、巻貝2種、何れも現生種の高橋種で、沿岸種性及び砂泥底性のものである。
11. *Pterocarya* *rhaifolia* SIEBOLD et ZUGCARINI サツグムシ
12. *Acer* *palatum* THLINB ERG カエデ (葉)
13. *Zelkova* *Cingeri* KOVATS ニレバケヤキ (葉)
14. *Palicourea* *nipponica* MIKI コクセキハマツノ (枝・幹)
15. *Bosa* *akashiensis* MIKI アカシナンセンヨバク (茎・根)
16. *Scheffera* (*Agave*) *fasciata* MIKI アカシカノキ (葉)
17. *Pinus* *densiflora* SIEBOLD et ZUGCARINI アカマツ (材片)

植物に於ては現生種8種と絶滅種8種を認め、今後の努力により、ますます増加するものと信ずる。今繼續して調査研究中である。

昭和41年8月29日、原時の切り下げ工事の時、現場附近の宅地造成付近で、児島武利氏により、フニ貫透骨18個、肋骨片20数個の化石が12m²内の粘土層から発見され、1個分のものとみられるが、大阪市自然科学博物館で、復元、研究されている。

赤岩層の化石は旧山城跡の崩落堆積物であると思われるが、古生層上に広く分布する礫層で、最厚260cmまで達する。フニが出土した地層は第三紀、鮮新世上部、大阪層群の第一高成粘土層である。(第3表)

原時の化石含有層は枚方-島岡線のバス街道の要路面にあつて、一見して見られる。京都府が天然記念物として指定した葛葉山山麓の状況に比し、本市のものは市民の盛めやすい位置にある。

遺跡町淀川河川敷のヨシ

所在地 高槻市遺跡町

概 要

市内のクドノ(通稱)町淀川北岸の河川敷にヨシ類の群生が上牧町まで続いて庄大な景観である。仕時は西園街道から道端(鷺鷥)・上牧の間のヨシ原を通過して、対岸の牧方へ渡る渡舟があつて、交通の重要な要路であつた。今は僅かに道標が残っているにすぎない。淀川堤防の改修工事が完成したため、遠方の山城・巨津方面の被害がなくなったが、河底は次第に低くなつた。故に河原のヨシ原が浸水することも年に数回というようになった。堤防外からはコンクリートの水路を通過して淀川に注ぎ込むだけである。雨期出水時増水でヨシ原が浸かる時は、水路を通過して淀川の堤防外に流れ込み、魚類等は年何回か往き来が出来るのである。

この河川敷、即ち河原のヨシ類群生地のヨシの種類は第1表の如くである。

ヨシ類3種共多年生植物で、そのうちツルヨシは荒地の砂礫地を好み、川の上流地に多く、時に山間の砂礫地にも自生する。ヨシ及びクドノヨシは下流の肥沃地に自生する。ヨシが優位で、クドノヨシは其の周辺の水野に多い。ヨシ類中最も秆が太く、地上茎の浮根を生ずるが、他のヨシ類には出来ない。ヨシ・クドノヨシは地下茎に短縮枝を生ずるが、ヨシは浅く、クドノヨシは深へ。分布上からみて、暖地性のものが、冬期に等しい北州中部まで分布できる理由は地下茎が深く、越冬しやすいことが原因である。地下茎の浅いヨシが繁殖すると、これより優位となるから、クドノヨシは自生地域も狭く比較的範囲に多い。ヨシ類の秆は強が中空になって竹と同じようになり、腐紙を生ずる。ヨシ・クドノヨシの地上茎の秆は直立し、当地では4m近くに達する。

ヨシ類の葉は葉柄が葉鞘となつて秆を包み、葉片が左右に出る。秆に対する葉片(葉身)の角度は次の第2表に示す如く異なるから、其の發つて来る順序に區別することが出来る。

ヨシ類では無いが、ヨシタケはクドノヨシより巨大で、秆は細かく、葉は黄緑色の水辺を好み植物で、共に暖地性である。地上茎には枝を生ず。又、ススキ類 *Miscanthus* に属するオギヨシ即ちオギは、秆が極めて細いが、その表面に光沢があつて鋭い。共に秆の髓は充突して、ヨシ類の如く中空にならない。ヨシ類と類似の形態比較を示すと第2表の如くであるから、詳細に比較された。

植物体の中軸となつている部分を普通茎 *stem* と称するが、其れには草本茎 *stalk* と木本茎 *stem* とがある。普通草質のものを茎、木質のものを幹という。これに節 *tonus* があつて、節と節の間を節間 *internode*

という。普通中空であるものを特別に稱 *culmas* (*halm*) と名づける。この葉の内部の脈管束(維管束) *nursular bundle* に囲まれた組織を髓 *hith* と称せられる。多くの場合比較的大形な柔細胞組織 *parenchyma cells* からできている。時に石細胞 *stone cells*、纖維細胞 *fibro* と稱する特種な有膜細胞を混じり髓組織管束 *medullary layer vascular bundle*、樹脂溝 *resins perforation* を有することもある。秆の若い時代、細胞中に澱粉粒、糖類等の貯蔵組織となり、ナトクキ *Saccharum officinarum* LINNAEUS、ナトクモロコシ *Andropogon Sorghum* BROTT. var *saccharatum* KOERN 等の場合は大部分の髓細胞中にある。故に秆の若い時代は柔いから、カイガラムシ(介殼虫)科 *Coccidae* の *Eriococcus*、*Asterolecanium* *Aclerda*、*Chioaspis* spp 等、或はアザミ(木茎)科 *Psyllidae*、アザミ(節茎) *Aleyrodidae* 等の害虫が発生すると秆の成長を阻害して不良となる。従つて節に述べる組織にも影響し、又材料も汚れて洗滌が必要となる。現在高安市の岬には悪質のカイガラムシが繁殖 *leaf sheath* 中に発生しているが、薬剤では効力なく、これを駆除するためにも、当地は冬季の凍結は必要で中止することとできない。茎秆が成熟するに伴い細胞は急速に硬化する。ナリ *Penlonia tomentosa* STEVEDEL の如く発育途中の一部破裂を生じ、ムズリ *Daphniphyllum macropodium* MIQUEL の如く筒状の髓を生ずるものもあるが、ヨシ類、タケ類では全く空洞化する。稲 *Oryza*、*KOCH* は巨大な白色角一の髓を生じ、薄皮層として色紙造花、水中花成は昆血華本用針古、薄皮層に使用されている。コトコ *Saxifraga* *SIEBOLDIANA* の髓は炭酸に用いる植物組織の切片材料に使用する。その他マツ *Fatsia japonica* DECAISNE et PLANCHON、タラノキ *Aralia elata* SEMANN、ハコケ *Walgelagrandiflora* FORTUNE、アカザ *Chenopodium centrosebrum* NAKAI、クイ *Helianthus fubex* *caus* LINNAEUS 等が使用される。マブキ *Kercis japonica* A.P. DECANVILLE の髓は山砂鉄、酒中花、水中花に用い、イ(トクシツク) *Juncus decipiens* NAKAI は巻心用として古来より広く使用されている。その他腐紙の乾燥として考えられるカミヤザリ *Cyperus papyrus* LINNAEUS の髓は炭酸に煮ね、注水後、圧搾乾燥し、これをペパラス樹と称して使用する。

ヨシ類、タケ類の髄は揮発性の途中破壊して中空となるが、破壊した髄細胞は揮の内部周辺に被膜状に残存する。これをヨシ類の種から採取したものを藁紙と称して資材用シヤク(笠)、ヒチリキ(蓑葉)の響口の覆舌に響紙として貼る。ヨシは全国各地に広く分布自生するが、高槻市の淀川西岸産のものが最良とされ、宮内庁豫備部用として用いられ、古来より秘事とされたものである。それは最も柔かい音響を出すと共に強さがあると思われる。

シチク *Bambusa Stemostachya* HACKEL, ハチク *Sinoarundinaria nigra* OHWI var. *Henonensis* HONDA から採る竹紙は明善用とされる。台湾のクイチク *Phyllostachya Makinoi* HAYATA を原料として作った紙も竹紙と称し、成は曬皮紙、唐紙と言う。

ヨシ類の種葉片に蒔きにする。屋敷草き材料として、他にススキ類 *Miscanthus* spp, オギ *Miscanthus sacchariflorus* BENTHAM et J.D. HOOKER 等の茅草、ムギ類 *Hordeum* spp, イネ類 *Oryza* spp 等の莩草等の草葉に対し、ヤマヘギ類 *Cannabis sativa* LINNAEUS 栽培地では表皮、剥皮後の半殻等も用いている。

種の若いヒノヨシはスノコ(糞子)を作りアナクナノリ *Porphyra vexans* UEDA, その他若葉の乾燥用にするか生理と調を造り、成は藁を作つて魚干物を乾燥用にする。

種の焼きものをスメン(糞)太きクドノヨシ、成は混合してヨシズ(糞糞)を作る。夏期の日傘用とし、通風があるので、その用途は極めて広いものである。小笠、茶店、成は茶畑、護国用に用い、釣舟者は天井に使用しつゝする。成は料理店の炭盆小鉢、中国ではジャンクの蓋にする。又糞を押し染し、黒平として、粗織したものをカ(藁葉)と称し、天井、蓑、蓑袋等に用いている。静岡市産品の赤

生遺跡の住居址からも似たものが出土している。その他藁紙原料に使用されている。中国では芻を藁芻と称し、多少苦味あるも甘味あり、生食成はタケノコ同様の調理法によつて、食用にする。アヒスは地下茎と若芽を常食とする。

ヨシの根を藁根と称し、その煎割は利尿、鎮吐、駆風、黄直成は魚肉類の中毒に用いる。1回量は8〜30gである。

以上の如くヨシ類の用途は非常に広く、特に高槻市のものは、由緒があつて貴重である。年々全国各地、例えば琵琶湖周辺、関東地方で次第に自生地が減少する状況である。川原をゴルフ場或は公園遊園地となることをやめて往時の景観、この自然の壮大な自然観況の姿を保存するために、その一角を天然記念物として保存したい。境界には金網をし、みだりに進入することを止めたい。

又此処に棲むカマネズミ *Micromys minutus japonicus* THOMAS は本州、四国、九州に分布するも、国内にはこのほかモンシ、クアカネズミ *M. mindonensis* KURODA、ツシマカネズミ *M. mindokii* KURODA 以外、鼯鼠にも1種を産するが亞種名は不明である。台湾朝鮮にも別亞種を産するが、その生態に就いて、詳細な点が充分でない。本種は体長と尾長は等しく、成は体長より長い。その先端でヨシ類の穂を巻いて上下する。晩春から初夏に互り、ヨシ類の穂上に巣をよせ合わせて小鳥状の巣を作り、仔を5〜10頭位の産む。巣は円く径8〜9cm である。巣の高さは定期的に浸水せぬ高さで造る。その高さによって、往時巨陸池附近では洪水の状況が推知出来たという。巣のある地上には縦横の穴を穿て、別な巣をつくり外敵から逃れ、又、夜間、冬季の巣となる。故に原獲を行なつても全滅することはない。本種に似るものに、谷長より尾の短いハクネズミ *Mus* spp があるが、カマネズミは人家に進入しない等の野生種で、水辺環境のみで生棲する。

オモモ以外の発用に適する水路には天然記念物に近年指定された珍しいイヌセンブリ(ビタナブ) *Acheilloglossus longipinus* (REGAN) が生棲する。

渚の化石層

第1表 高槻市北方丘陵地帯の鮮新世・沖積世の化石含有層例

区 域	層 状	厚さ(m)	走向・傾斜	備 考
新宮西北部 (芥川沿い)	青色粘土層、灰色粘土層、褐色粘土層 15 m, 砂層 7 m	22.0	NS, W16°	三島層
島皮原、高地 120 m	粘土層、一部砂質層	106.0	N40°E, SE16°	
總持天皇陵西北河岸	砂質・粘土層 9 m, 垂戻 0.1 m, 砂層 0.5 m, 砂層 5 m	12.6		大原層群三島層
堀井地区北原川沿い	青色粘土層、砂礫層		N40°E, SE60°	
上村附近泉原	青色粘土層、砂礫層、砂質砂礫層			
高槻北方 最高 250 m まで分布	砂礫			高槻層群
高槻橋下谷間	青色粘土層・薄・砂礫層 1 m 生す			三島層 (基岩・堆積化石)

第1表 高崎市通商町産出河川数の種類比較表

種名	種名		分	生	備考
	子	名			
1 Phragmites Karst TRINIUS (セイコノヨシ)	ク	ク	本州(南関東、山陰、九州、琉球、Formosa, Korea, China, India, Malaya, Micronesia, Australia)	(自生地・その他) 水渚地帯生、河川下流を好む。 根に小枝を生ず。 葉は中葉である。	
2 Phragmites longivalvis STEUDEL (アザミ)	ク	ク	北海道、本州、四国、九州、琉球、Sakhalin, Formosa, (北半球温帯)	水渚地帯生、河川下流を好む。 根に小枝を生じない。葉は中葉である。 地下茎は短葉を生ず。	
3 Phragmites japonica STEUD (アザミ)	ク	ク	本州、四国、九州、琉球、Formosa, Korea, China, Manchuria	河群、山脚、砂礫地帯生、河川上流地帯を好む。 根は中葉である。葉は短葉なし。地上茎は短葉を生ず。	
4 Arundo Donax LINNAEUS (アザミ)	ク	ク	本州(南西側)、四国、九州、琉球、Formosa, China, Mediterranean沿岸	河群の砂礫地、河川下流を好む。 根に小枝を生じ、根は中葉である。 葉は短葉である。2~3年生存。	南海地方には短葉自生する。
5 Miscanthus sacchariflorus BLACK (アザミ)	ク	ク	北海道、本州、四国、九州、Korea, Manchuria, N-China,	原野、河岸、湿地、水渚、河川下流を好む。 根は短く、葉は中葉である。	

(備考) Sakhalin, 本州北部に自生するものもセイコノヨシ Phragmites communis TRINIUS と称し、広く分布する。
本州南部地方に自生するものをセイコノヨシ Phragmites Nakaiana HONDA と称し、地方的な種である。
ヨシと類を混にするヨシノケの栽培品種をフィリピンチク(セイコノヨシチク) Arundo Donax LINNAEUS var versicolor KUNTH と称し、栽培用として用いられる。

第2表 ヨシノケ及び類似植物の形態比較表

種名	地上茎(幹)			地下茎			葉			備考		
	幹長	節性	節間長	節の径	葉数	葉長	長さ	太さ	葉片長		葉片巾	葉に対する角度
1 アトノヨシ (セイコノヨシ)	2.0~4.0 (m)	有り	20 (cm) 葉節より長い	20~25 (mm)	15~18	100 ± (cm)	300 ± (cm)	25~33 (cm)	50 (cm)	4.5~5.0 (cm)	25°~30°	地下茎 腐土上
2 アトノヨシ (アザミ)	4.0~4.5 (m)	無し	葉節より長い	12~15 (mm)	9~13	80 ± (cm)	200 ± (cm)	12~16 (cm)	45~55 (cm)	4.0~5.0 (cm)	60°~70°	地下茎 水中 水深20m以下
3 アトノヨシ (アザミ)	1.5~3.0 (m)	有り	葉節より短い	8~9 (mm)	15~30	20 ± (cm)	110~200 ± (cm)	7~20 (cm)	40~55 (cm)	2.4~5.0 (cm)	40°~45°	地上茎 陸上
4 アトノヨシ (アザミ)	2.0~4.0 (m)	有り	葉節より短い	1.5~3.0 (mm)	20~25	30~90 ± (cm)	100~200 ± (cm)	25~35 (cm)	50~70 (cm)	2.0~2.5 (cm)	25° ±	地下茎 腐土上
5 アトノヨシ (アザミ)	1.0~2.5 (m)	有り	葉節より長い	5~10 (mm)	9~15	20~100 ± (cm)	100 ± (cm)	6~15 (cm)	40~80 (cm)	1.0~3.0 (cm)	30° ±	地下茎 陸上

5. 埋蔵文化財

1. 安満遺跡

所在地 高槻市高垣町244

調査面積 470m²

調査期間 昭和49年5月24日～6月5日

調査経過

当調査区は安満遺跡の区割では東1A～Bにあたり、昭和47年度および昭和48年5～6月にかけて調査を実施した地区（報告書発行済み）に隣接している。ここに個人住宅の建設が予定されたため発掘調査を実施した。持土置場等の関係で実際の調査面積は東西3m×南北2.0mの狭小なものとなった。

遺構

ほぼ南北方向の幅0.6m、深さ0.15mの溝が検出された。他、幅0.5m、深さ0.3m程度の柱穴数個と直径0.3m、深さ0.2m程度の柱穴10数個が検出されたが、調査範囲が狭小なために明確に遺物などを確認することはできなかった。

遺物

瓦器、須器類、土師器などが若干検出された。

所見

中世村落の一部を調査したが、遺構の性格を知るにはいたらなかった。しかし、当調査区を含め北側には中世村落の遺構が広がっていることが確認された。

2. 安満遺跡

所在地 高槻市安満東之町404

調査面積 450m²

調査期間 昭和49年8月5日～8月3日

調査経過

当調査区は北8地区（安満遺跡の地区別）で国鉄南海道本線と西宮街道に挟まれている。昭和48年2・3月にかけて調査した地区の東端100mにあたる。この場所に建築場が建設されることになったため計画地の中央部に幅1.5mのトレンチを十文字に設定して調査を行った。

遺構

トレンチの断面で土層を観察すると、耕土(0.15m)、床土(0.17m)、灰褐色土(0.25m)、黄灰色砂質土の層積順で黄灰色砂質土がこの付近での地山である。いづれの層においても遺構らしきものは確認されなかった。

遺物

灰褐色土から弥生式土器、土師器の破片が若干検出された。

所見

若干の遺物が検出されただけで安満遺跡の北限を示すようである。

3. 安満遺跡

所在地 高槻市高垣町262-1

調査期間 昭和50年3月5日～3月10日

調査経過

当該地は10-J・N地区にあたり、昭和47年から昭和48年にかけて調査した中世集落跡と昭和48年12月に国庫補助事業として調査した地区の中間である。近年の安満遺跡東方の調査によって、この地区に掘立柱建物を中心とする遺構が密に広がっているものとおもわれるため調査を実施した。調査対象の水田が三角形を呈していたため、南北約5.0mのトレンチを設定した。

遺構

トレンチの北側で土層を観察すると耕土(0.1m)、黄褐色土(0.1m)、灰褐色土(0.4m)、暗褐色土(0.4m)、黄褐色砂質土の層積順であるが、トレンチ中央から南側では灰褐色土層下に黄褐色砂質土あるいは灰色砂礫が0.5～0.6m堆積している。昭和48年末に調査した地区の南端でも黄褐色砂礫の堆積した溝が、それ以前の付近の調査でも砂礫層が確認されており、西北から南東にかけて砂礫層の堆積した幅広い溝が流れていたものとおもわれる。この砂礫層の上面から幅0.6m程度、深さ0.3～0.5mのピットが3個断面で観察されたが、掘立柱建物の柱穴か他の遺構かは確認できなかった。

遺物

灰褐色土、暗褐色土層内から土師器、須器類が出土した。

所見

安満遺跡東方の集落跡の広がりを確認することができたが、遺構の性格を知ることはできなかった。今回調査した地区では砂礫層の上から掘さした遺構が確認され、榑尾川の乱流原上に集落を営んでいることが知られる。

今年度調査を実施した天川遺跡など、中世集落を知る資料が増加しているのとあわせて今後ともこの付近の調査が重要である。

4. 塚輪2-1号墳

所在地 高槻市黄金の里1丁目52

調査面積 750m²

調査期間 昭和49年8月20日～8月30日

調査経過

塚輪古墳群は昭和38年・45年の2度の発掘調査や分布調査等によってよく知られている古墳群である。ところ

が、古墳は昭和49年3月に高野宅の敷地内で偶然に発見されたもので、その存在は現在まで知られていなかった。そこで高槻市教育委員会は高野氏の許可を得て、昭和49年3月20日より発掘調査を実施した。

古墳の位置は市山南斜面標高90mのところであり、塚脇1号墳の北方にあたる。

遺構

調査当初より墳丘は遺存せず、主体部である横穴式石室も天井石等はなく、その一部は露出していた。石室の石材は花崗岩を使用しており、奥壁および東西両壁の基礎石と東側壁の一部に、二段目まで石積が遺存していたが、両側壁南辺は石積がなく抜き跡が検出された。なお明墓の有無は不明。平面形は無袖の形式で、内法は長さ5.4m、幅1.3mになる。床面は花崗岩の削石で敷きつめられていて、奥壁から2.8m以南では若干の山石を使用している。敷石の下には幅25cm、深さ8cm程度の排水溝が奥壁直前から南へ石室および羨道の中央を縦貫している。

堀方は西側上部が削平されているが、下辺で幅3.5mを測り、石室幅に比して大きくなっている。また、その断面は矩形をなしている。

墳形および墳丘規模はトレンチ調査の結果、幅1.3mの壕をめぐらした一辺10.3mの方墳であることがわかった。

遺物

鉄製品は全て石室内から出土していて、鉄製刀子1点、鉄製留め金具2点、鉄釘30余点、不明鉄片4点等がある。土器は須恵器と土師器があり、須恵器は若干の破片が石室内埋土や排土の中から出土している。土師器は排水溝中にまざままとして出土したものと、排土中から別個体のもの1点が出土している。

所見

鉄製品が敷石上面と敷石下から出土したものと2つに大きく分かれること、および排水溝中から土師器が出土したことから、遺跡が行われていたことがわかる。なお土器は銅片のため時期の判別は困難である。しかし、石室の規模・形態から6世紀末～7世紀前半頃と推定される。

5. 塚脇古墳群

所在地 高槻市郡家新町

調査面積 1250㎡

調査期間 昭和49年7月20日～8月24日

調査経過

高槻市立総合福祉センター建設予定地に古墳時代中期の共同墓地が、新しく見つかったのは昭和48年7月末であった。遺跡は第2次範囲確認調査によって西に約60mま

で広がっていると推定された。

今回、同建設予定地内老人福祉センター建設に先立って発掘調査を実施した。

遺構

調査範囲北側でピット5個と方形土塚高1基とS字状の長さ4m、幅0.6m、深さ0.2mの溝を検出した。

遺物

床土より磁輪片が若干出土した。

所見

方墳の西一帯に分布する7世紀前半の南塚と西塚を推定した。その結果、遺構の分布範囲は東西100m、南北100mにおよび、現在の盛土下にも、なお土塚基群が埋没していることが判明した。

6. 塚原O-1号墳

所在地 高槻市塚原1丁目3-20

調査面積 105㎡

調査期間 昭和49年10月25日～11月1日

調査経過

塚原古墳群は阿武山の南麓に100基余の古墳が群集する大塚でも代表的な古墳時代後期の群集墳である。これら多くの古墳は土取り、宅地造成等によって過半数のものが消滅した。今回調査したO-1号墳は大谷池のすぐ東側にある南向き斜面に位置する。全日空(株)寮の建設計画地内にあるところから当社と保存について話し合いを重ねた結果、古墳範囲については公園として保存されることとなった。そこで、墳丘周辺部において範囲確認および外辺部の発掘調査を実施した。

遺構

古墳の外形実測をおこなった結果、墳丘の直径1.8m、高さ2.5mの円墳であることが判明した。この古墳は横穴式石室の石積が抜き取られており約1mの高さのみとなつて、石室の一部が露出している。墳丘北側と西側の一部で堀溝と考えられる幅0.6m、深さ0.2mの溝を検出し、両では石室から南に延びた幅1m、深さ0.5mの断面T字状の排水溝を長さ約5mにわたって検出した。

遺物

墳丘南東部の盛土中より弥生式土器の高杯底部を1点検出したほか、排水溝上側から須恵器片23点を検出した。その中には鏡器器台に付けられた人形などめづらしい遺物も出土している。

所見

古墳の周辺部を溝状に調査したのみで、内部については不明である。塚原古墳群の中でも大きな墳丘と鏡器器台を

持つことなど考えれば有力な首長の家墓であろう。また、1点ではあるが弥生式土器の出土したことは付近に遺跡の存在を予測させる。

7. 香山古墳

所在地 高槻市上土室5丁目418-1

調査面積 187㎡

調査期間 昭和50年2月10日

調査経過

香山古墳の東に位置する。当該地に個人の住宅建設が計画されたため、調査を実施した。

調査地が香山古墳外縁に隣接するところから外縁外の遺構の存在についてトレンチ調査を行う。

遺構

層序は礫土(0.8m)、粘土(0.2m)、黄褐色砂質土(地山)である。遺構らしきものはない。

所見

当該地と古墳外縁との間には幅0.6mの水路および幅0.6mの里道があり、今回の調査は香山古墳の外である。

8. 奥坂古墳群

所在地 高槻市別所本町30-1他

調査面積 4,428.0㎡の一部

調査期間 昭和50年2月12日～2月28日

調査経過

当該地に紅葉山遺跡、紅葉山古墳群の西に位置する。以前、市立第八中学校建設時に周辺の分布調査を行なった際、塚塚跡(井)の敷地内で古墳3基を発見している。

今回、市立飯形警手第二小学校建設が計画されたため、予定地内で調査が可能な地点について試験調査を実施した。

遺構

丘腹の南斜面一帯で穴式石室と古墳の遺構が出土した。特に穴式石室は幅0.5m、長さ約2.5mの小規模なものである。

遺物

穴式石室内に隠蔽されていたサツトの遺骨を石室内のほぼ中央に出土した。(約7世紀前半)

所見

建設予定地全面にわたる調査が不可能なため、数ヶ所のトレンチ調査を実施したが、今回の調査で確認出来ることは丘腹の南斜面一帯には古墳時代後期の古墳が数基存在していると考えられる。一方、他の地域については一応遺構は存在しないものと考えられるが、十分な調査が出来ない状況下からみて調査が信頼された時点で一定の認識が必要であると考えられる。

9. 嶋上郎前跡

所在地 高槻市郡家本町315-1

調査面積 100㎡

調査期間 昭和49年3月11日～20日

調査経過

当該地は辻子・下ノ口線と郡家茨木線の交差する地点の西北角にあたり阿久刀神社の南150mのところである。ここに個人住宅の建設が予定されたため、史跡指定地より北へはずれているが然而と関連する遺構の拡がりも想定されたため調査を実施した。

遺構

粘土(0.2m)、暗褐色土(0.2m)の堆積で遺構は比較的浅いところから検出される。

調査区の西半分からは細かい河原石を敷きつめていたのが検出された。調査区の東半分では1間×2間(柱間2.2m)の建物1棟を確認することができたほか、この建物と同方向の幅1.4m、深さ0.1mの溝状の落ち込みを検出した。(建物の方向はN-A-Wである)時期は奈良時代であるが、この建物以外の小柱穴からは瓦器が検出されていて奈良時代から中世にかけての遺構が重複しているようである。

遺物

暗褐色土層から土器器、須臾器が若干検出された。

所見

調査範囲が狭小なため、建物が1間×2間なのか、それ以上の規模であるかを確認することはできなかったが、郡家関係の建物群が史跡指定地の北側にもかなりの範囲で拡がっていることを確認した。また、石敷についても性格を知るにはいたらなかったが、今後この付近の調査が重要となるであろう。

10. 嶋上郎前跡

所在地 高槻市川西町1丁目12番951

調査面積 475㎡

調査期間 昭和49年8月19日～9月11日

調査経過

当該地は川西小学校の約100m東側の住宅地内に残された水田で、宅地造成工事が予定されたためこれに先立って調査を行った。造成予定地が南北に狭いため幅2mで南北5.2mのトレンチを設定して調査を行った。

遺構

トレンチが長いため北側と南側では土層の差異がある。北側では粘土(0.2m)、茶褐色土(0.3m)、暗褐色土(0.3m)、灰伏土(0.6m)、茶褐色土の堆積層で

ある。中央より南側では砂層、粘土層が複雑に重なり合っていて遺構も検出されなかった。

トレンチの中央より北側では土成基とおもわれる遺構が4基検出された。完掘されたものは2基だけである。1基は幅0.8m、長さ2m、深さ0.5mで他の1基は幅0.6m、長さ1.2m、深さ0.3mを測る。方向はNW-S Eのものが3基、他はこれらほぼ直交するものである。また、トレンチ中央部で深さ0.1m、一辺約4mの方形整穴状の遺構が検出されたが、柱穴らしきものは検出されず住居跡かどうかは不明である。

遺 物

暗褐色土層および暗灰色土層から土師器、須恵器、弥生式土器が検出されたが調査区南側の砂層や粘土層からはまったく検出されなかった。

所 見

現在の芥川に近い場所を調査したためであろうか、遺物や遺構が確認されない砂層や粘土層からなる部分もあるが土成基群とおもわれる遺構を確認した。

当該地および本年報に収録した付近の調査や以前町教委の調査した地区とあわせて、川西小学校の東側の地域には方形周溝基群を中心とした基城があったことを確認した。

11. 嶋上郎高跡

所在地 高槻市川西町1丁目955番地の4
調査面積 94㎡
調査期間 昭和49年8月10日～9月13日
調査経過

当該地は川西小学校より50m東側の住宅地内で、個人住宅の建設が予定されたので、発掘調査を実施した。調査地はすでに1.5mの盛土が行われていたため巻機を使用して3m×4mの調査坑を設けた。

遺 構

土層は耕土(0.2m)暗灰色土(0.3m)灰褐色土(0.2m)暗灰色土(0.6m)黄褐色土の埋積層であり、いづれの層からも遺構らしきものは確認されなかった。

遺 物

暗褐色土層内から須恵器、土師器の破片を若干検出しただけである。

所 見

調査区域が狭小なために遺構を検出することはできなかったが、郡西関係の遺構が東方へ広がっていることが想像される。

12. 嶋上郎高跡

所在地 高槻市清福寺町315-3
調査面積 165㎡
調査期間 昭和49年9月30日～10月17日
調査経過

当該地は49年8月に調査した地区の東側(市道辻子・下の口線を隔てて)にあたる。個人住宅兼事務所建設が予定されたため発掘調査を実施した。

遺 構

耕土(0.3m)床土(0.2m)暗褐色土(0.3m)黄褐色土層の埋積層で黄褐色土層で遺構が検出された。

検出された遺構は土成基2基と建物が1棟ある。

土成基はいずれも調査区の壁ぎわで検出されたもので全長はわからないが幅0.6m、深さ0.2mを測る。方向はNW-S Eとこれらほぼ直交するものである。

建物はN-83°-Eの方向で1間×2間が群居されたが、調査区の西側につづくものとおもわれる。(柱間は3.8m、2.1mである。)

この建物の柱穴の掘り方は一辺約1mを測り、深さ0.4m程度のものである。

遺 物

暗褐色土層内より土師器、須恵器、弥生式土器が検出された。

所 見

市道辻子・下の口線を隔てて西側で調査したものと合わせて史跡指定地より北側に建物群が広がっていることを示している。

13. 嶋上郎高跡

所在地 高槻市清福寺町319-1
調査面積 210㎡
調査期間 昭和49年10月11日～10月17日
調査経過

当該地は川西小学校の東北約250mの地で嶋上郎高跡の東端にあたる。個人住宅の建設が予定されたため、発掘調査を実施した。掘地の中央にあたるため、2m×3mの試掘坑を設けて土層の観察・遺物の有無を調査した。

遺 構

試掘坑の縦断で土層を観察すると耕土(0.3m)、黄褐色土(0.4m)、暗褐色土の埋積層である。黄褐色土層上面で直径0.3m程度の柱穴を確認することができ、また地山とおもわれる黄褐色土層内で幅1.2m、深さ0.3mの溝を確認することができた。

遺 物

暗褐色土層および茶褐色土層より弥生式土器、土師器、須恵器を検出した。

所 見

調査した範囲が限られているため、遺構の性格や時期を知ることはできなかったが、嶋上郡高橋の遺構の拡がりを確認した。

14. 郡家川西遺跡

所在地 高槻市郡家新町 350-8
調査面積 330㎡
調査期間 昭和49年10月18日
調査経過

当該地は史跡・嶋上郡高橋南寺跡の南西に位置し、郡家川西遺跡の西端と推定されているところである。今回、個人住宅の建設が計画されたため、調査を実施した。

調査は幅2m、長さ10mのトレンチを設け、遺構の状況を知るため試掘調査を行った。

遺 構

層序は盛土(0.6m)、耕土(0.2m)、黄褐色土(0.3m)、灰色粘土(0.1m)、黄褐色砂質粘土(地山)である。遺物は検出されず、また遺構らしきものは確認されなかった。

所 見

当該地が遺跡の西端に位置するところから試掘調査を実施したが、遺構らしきものが確認されなかったため、遺跡の西端は若干東方にあるものと推定される。

15. 嶋上郡高橋

所在地 高槻市清原寺町 8-25
調査面積 65㎡
調査期間 昭和49年12月9日～12月15日
調査経過

当該地区は昭和48年11月に調査した23-N地区の10m北側にあたり、個人住宅の建設で先立って発掘調査を実施した。

遺 構

地表以下約1.2mで茶褐色土層(餅まじり)の地山になり、上層は約0.8mの盛土でありその下0.4mは黄褐色土層で弥生～奈良時代の遺物を包含する豊地層である。遺構は土坑遺8基とピット8個を検出したが、深の5mはおよそ0.2m低くなって遺構は検出されず、地山も青灰色砂礫層であった。

遺 物

黄褐色土層である豊地層より弥生式土器片及び奈良時代

の土師器片を若干検出した。

所 見

芥川より約150m西にあって、郡家川西遺跡の東限と考えられる。この地点より約100m南においては弥生時代中期の共同墓地が確認されているので、この付近一帯も弥生時代の墓域と推定される。

16. 嶋上郡高橋

所在地 高槻市川西町1丁目955の6
調査面積 210㎡
調査期間 昭和49年12月12日～12月23日
調査経過

当該地は川西小学校の東側の住宅地内にあり、共同住宅の建設が予定されたため調査を行った。

すでに、1.6mの盛土が行われていたが巻線を使用して掘き出した。棟上置場や付近の住宅などから幅2m、長さ10mの南北方向のトレンチを設けて調査を行った。

遺 構

トレンチの壁面で土層の観察をすると、耕土(0.2m)床土(0.2m)、褐色土(0.2m)、暗褐色土(0.4m)の堆積順で地山は黄褐色土である。

トレンチ中央部で深さ0.8m、幅1mの溝状遺構が東西方向に確認された他は何も検出されなかった。

遺 物

褐色土、暗褐色土層中から土師器、須恵器などが検出された。また白磁器の破片1個が検出された。

所 見

史跡指定地に近く、また当該地区の北側では方形周溝墓群なども検出されているため、密な状態で遺構が残存していると想像されるが、狭小な調査範囲では遺構の性格や時期などを知ることができず、遺構の拡がりを確認したのみである。

17. 嶋上郡高橋

所在地 高槻市清原寺町 591-2
調査面積 600㎡(東西40m・南北15m)
調査期間 昭和49年12月13日～12月23日
調査経過

当該地区は昭和48年1月に発掘調査した地域の東端にあり、府道の南側に位置している。

今回、水田が宅地化されることになったため、これに先立って発掘調査を実施した。

遺 構

発掘区の北側断面によると東土下に黒色粘土層(豊地層)

があり、それを切つて黄灰色砂利(厚さ0.2m)の流路跡がある。底地層の直下は地山であつて、その西半分は青灰色砂礫からなり、その部分には遺構を検出できなかった。また、東半分は青灰色粘土層であつて、方形住居跡8基と土壇遺4基、10数個の柱穴を検出した。また、歴史時代の落ち込み2ヶ所は黒色粘土層を埋つている。

- 1号住居跡：南北6.7m・東西6m・南西隅石敷穴
- 2号住居跡：南北5.7m・東西5.7m
- 3号住居跡：東西5.6m
- 4号住居跡：東西3.9m
- 5号住居跡：不明
- 6号住居跡：不明

遺物

発地裏より赤土～弥生時代の土器片を多数出土したほか、5号住居跡の柱より元形壺・甕を検出した。2号住居跡からは滑石製ボタン(石ボタン?)が1個出土した。歴史時代の落ち込みからは土釜、須恵器、土師器片が出土したが、それらは平安時代に属すると考えられる。

所見

阿久刀神社を北麓に赤土時代後期の築物が形成され、御家川西端部の北部を中心とした赤土時代の遺跡分布を確認した意義は大きい。

18. 嶋上邸跡

所在地 高槻市廣徳寺町805-1
調査面積 150㎡
調査期間 昭和50年1月20日～2月26日
調査経過

当該調査区は昭和48年8月に発掘調査した北側の続きにあたり、歴史・古墳・赤土の各時代の無遺構と芥川の沼遺業と掘削されるものを検出した。

今回も南側と同部、掘入住宅の建設に伴って発掘調査を実施した。

遺構

床土下で茶褐色の地山に暗褐色土層の落ち込みが歴史時代のピット2ヶ所を検出したが、像物にまともなものはない。東端で芥川の流路らしき青灰色砂礫層の落ち込みを検出した。古墳時代の遺構は調査区の南西隅を西北～東南方向に走る幅2.1m・深さ3.5mの溝でその中には須恵器・土師器の完形品を含む黒色の土が堆積し、その西岸でピット2個を検出した。古墳時代前期では、芥川の侵蝕によってその岸は高さ1.5mの崖となり、その崖からさらに4.5m東でもう一段落ちる崖(河岸)を検出した。

遺物

古墳時代の溝からは五世紀末の須恵器・土師器の完形品を含む、土器片多数を検出した。また、その上面で滑石製の紡錘車1個を検出した。旧芥川の川岸近くの青灰色砂礫堆積土層からは赤土後期～古墳前期の上層片多数が出土している。

所見

今回調査したところは、芥川より約50m西にあつて、古墳時代前期にはこの辺一帶が芥川の沼遺業であつた。しかし、五世紀末になると、河岸が東に約15m移動していることを確認した。

19. 嶋上邸跡

所在地 高槻市廣徳寺町
調査面積 140㎡
調査期間 昭和50年1月23日～1月30日
調査経過

昭和48年、道路の中心部の約50,000㎡が嶋上邸跡附寺跡として史跡に指定された。しかし、近所において同指定地境辺部の宅地開発に伴う、雨水路の改修工事を行うことになったので、同工事の立ち、昭和48年3月に発掘調査した北園銀行貸の東側の南北方向の水路を含む70㎡にわたる、発掘調査を実施した。

遺構

調査区には水路を含む幅2m、長さ70mのトレンチを設定した。掘削は改修等によって擾乱されていたが、現水田面下0.7mで黄褐色粘土層(地山)に達した。トレンチ中央においては旧水路のため陥れてあり、幅1mの青灰色砂礫層が堆積していた。遺構は旧水路の外側に残った地山面において7箇所の柱穴を、また南端では植物遺体を包蔵する落ち込み2ヶ所を、さらに北側にはトレンチと斜めに交差する赤土時代後期の幅1m、深さ1.1mのV字溝を検出した。

遺物

旧水路遺構と2ヶ所の落ち込みより赤土の須恵器片・土師器片を出土した。

所見

調査区が南北に長く狭いため不明確であるが、すぐ西側の奈良時代の礎物群がこの水路の東まで拡がっていることを確認できた。また、トレンチと交差するV字溝は、かつてこの調査区に西接する北園銀行貸敷地内で出土したV字溝と連絡するものである。しかし、このV字溝がどのような性質のものかにはなかならわらない。おそらく、これより東に延びていることは想定するに難くない。

20. 嶋上郡高跡

所在地 高槻市川西町1丁目960
 調査面積 407㎡
 調査期間 昭和50年2月20日～3月8日
 調査経過

川西小学校の正門のすぐ東側にある当該地は、分譲住宅の建設に先立ち、発掘調査を実施した。調査地は、すべて0.7mの盛土が行なわれていたため、機械力(エンボ)によって敷地を東西に2等分し反転しながら調査を行なった。トレンチ中央では新しい池跡があって、その部分については東側で掘らないことにした。

概 観

大小約25個のピットと土坑墓2基を検出した。中央部に幅1.8mの新しい池が被覆によって1.5mの深さに掘られ、調査面積の大部分は覆乱されていた。

遺 物

発跡より弥生式土器片、瓦器片を若干と新しい陶器、磁器が多数見られた。

見 解

史跡 嶋上郡高跡古跡の指定地のすぐ東側になる当該地では、奈良時代の遺構、遺物は検出されず指定地内に2箇跡は収まっていると考えられる。

21. 嶋上郡高跡

所在地 高槻市川西町1丁目959番
 調査面積 483㎡
 調査期間 昭和50年2月23日～3月24日
 調査経過

当該地は川西小学校の分譲住宅地の一角にあつて、昭和37年5月に方形周溝墓群を発掘調査した地区から南西57mの所にあつた。
 調査地は、すべて盛土が0.8m行なわれた土地であつて、個人宅の建設に先立ち発掘調査を実施した。

概 観

弥生時代中期の方形周溝墓3基と土坑墓14基のほか住穴10基例を検出した。

〔1号方形周溝墓〕

西半分を掘出。南北辺10mで南北部に階層部を持つ。主体部は土坑墓1基が検出され北西隅内に土坑墓1基を有する。

〔2号方形周溝墓〕

東半分を掘出。南北辺12mで北側中央に階層部を持つ。〔主体部は土坑墓1基が検出され、南西隅内に土坑墓1基を有する。〕

〔3号方形周溝墓〕

西半分を掘出。南北辺9mで主体部は掘出できなかった。

〔土坑墓群〕

1号方形周溝墓・3号方形周溝墓と2号方形周溝墓の間で検出したが、方向・形状は一定していなかった。

遺 物

方形周溝墓各溝より土器片を少数検出した。

所 見

弥生時代中期の墓地在史跡指定地の東側一帯に設置され、方形周溝墓群も南北100m範囲にわたって分布していることが確認された。

22. 郡家今城遺跡

所在地 高槻市郡家新町194-5
 調査面積 66㎡
 調査期間 昭和50年2月25日～2月28日
 調査経過

今回の調査は府立三島高校の東側約200mの地点で個人住宅の増築工事が計画されたので、これに先立って範圍確認調査を実施した。敷地は3.5×5.5mの狭い場所であつて2×2mのトレンチを設定した。層序は盛土(0.8m)・耕土(0.2m)・床土(0.15m)であつた。その下には灰褐色砂質土の軟地層と考えられる薄い遺物包含層があり、その下に黄褐色砂質土層(地山)となる。遺物に須恵器片・土師器片9点が出土した。遺構は調査区域が狭いため確認出来なかった。

23. 郡家今城遺跡

所在地 高槻市今城町149-1
 調査面積 495㎡
 調査期間 昭和50年3月3日～3月4日
 調査経過

府立三島高校を中心として約300m四方の範圍が推定され、郡家今城遺跡は、昭和38年10月の発掘調査によって西の支那川・北を西環街道とて遺跡の範囲が明らかになった。今回、三島高校より北東約200m・西環街道より南約50mの当該地において、發掘範圍確認調査を実施した。敷地中央に東西18m・南北3mの両長辺トレンチを設定した。その結果、この地点では地表面下1.1mで地山になることが判明した。その層序は盛土(0.75m)・耕土(0.2m)・床土(0.15m)・黄褐色砂質粘土層(地山)である。トレンチ内においては、遺物、遺構は認められなかった。

24. 宮田遺跡

所在地 高槻市宮田町3丁目39他
調査面積 1,000㎡
調査期間 昭和49年6月10日～7月20日
調査経過

宮田遺跡は昭和47年に大規模な発掘調査が行われ、鎌倉時代を中心とする中世集落が女瀬川の南岸一帯に広がっていることが明らかにされた。以前から、弥生～中世にわたる各時代の遺物は、春日神社付近で採集されていたのであるが、縄文時代の新しい資料も加わって大いに問題を発展させるところとなった。今回、春日神社の東方100mのところで、道路の南・北両側の水田が宅地造成されることになり、これに先立って発掘調査を実施した。

遺 構

〔北区〕 耕土の下の床土は0.7mもあった。中央東西方向を東に流れる幅10m・深さ1.4mの河道(旧女瀬川)とその北に幅1.5m・深さ0.6mの小溝を検出した。

川の堆積土中からは、弥生～古墳時代の遺物と多数の流木が検出された。河道が埋まった後にできた、奈良時代の包含層は厚さ0.2mを割り、河道域の北側には、土城基3基を、同南岸には40数個の柱穴を検出した。

〔南区〕 トレンチ東西隅で3×3間の倉と2×1間の掘立柱建物と重複する柱穴群を検出したほか、調査区の南西隅で交差する幅0.8m・深さ0.2mの溝を検出した。北区と約3.5mの間には遺構は検出できなかった。この両隅の一段低い道路敷では、約1mの暗灰色粘土層が堆積していたので池跡と推定される。

遺 物

北区の北東隅で先土器時代の竇状制片が1点出土した。旧女瀬川の青灰色粘土～礫層からは、弥生式土器・土師器・流木が多数出土した。南岸の上部包含層からは奈良時代の須恵器・土師器片が多数出土した。南区の池跡からは鎌倉時代の瓦器・土師器・磁器片を少数出土した。

所 見

先土器時代から中世にわたるまで女瀬川の南岸一帯に遺跡の存在を証明した意義は大きい。今回調査した範囲では、遺構として奈良時代の建物群以外の時期は検出されなかったが、東方の鎌倉時代の集落が形成される以前に、一段高い場所を選び奈良時代の集落が形成されたことは、中世集落論を考ふるうえで重要である。

25. 天川遺跡

所在地 高槻市須賀町
調査面積 40㎡

調査期間 昭和49年12月25日～12月26日

調査経過

当遺跡は昭和初期の河川新築に掲載された多数の瓦器碗の出土した遺跡と推定されていたが、最近までまったく詳細は判らなかつた。

本市交通安全課により北大冠水路の西岸に自転車道が設置されることになり、内岸の水田を掘きしたところ下記に遺物が検出されたため発掘調査を実施した。

掘きされた部分を幅0.5m、長さ80mにわたって断面観察を中心として調査を行った。

土層は耕土(0.25m)黄灰色土(0.4m)灰白色粘土(0.18m)褐色土層(0.6m)青灰色粘土層の堆積層である。いづれの層でも遺構らしきものは検出されなかつた。

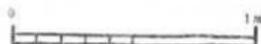
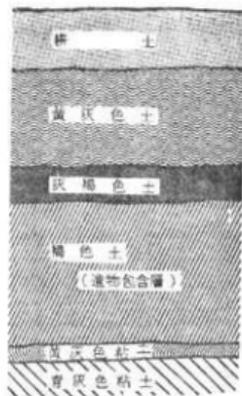
遺 物

褐色土層内から瓦器、土師器、青磁破片が検出された。瓦器はいづれも断片的に比較的新しい時代のものである。

所 見

以前より平安末から鎌倉にかけての集落を知るうえで重要であると指摘されていたが、遺跡として調査されたのは今回がはじめてである。遺物からみて従来調査されてきた中世集落と関連するものであり今後の調査に期待される。

天川遺跡の層序



■ 高槻市立仮称埋蔵文化財調査センター

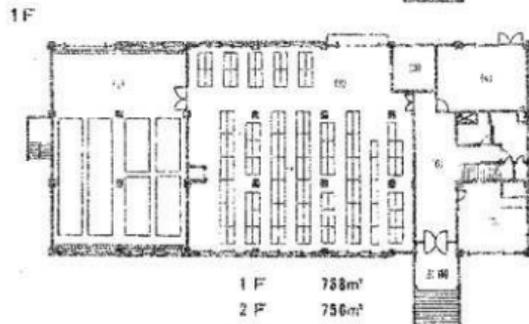
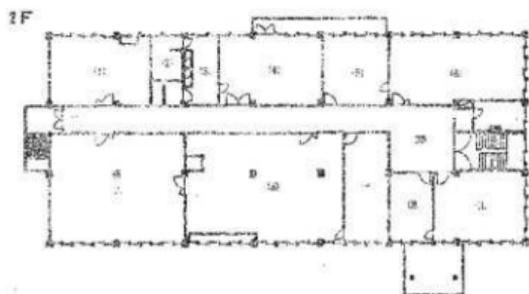
名称	高槻市立仮称埋蔵文化財調査センター
場所	高槻市南平台4-9-6, 4-9-9
地丁費	191,268,000円
設計	株式会社丹倉建築設計事務所
竣工	大田博地共同企業体
工事概算	鉄筋コンクリート造 2階建
敷地面積	3,319㎡
建物面積	829㎡、延面積：1,547㎡
着工	昭和50年2月12日
竣工予定	昭和50年9月30日
竣工	

高槻市は埋蔵文化財の宝庫といわれるほど遺跡が多く存在し、これらの遺跡から出土する遺物等は歴史的なものである。この遺物の発掘・収蔵を担い、仮設の倉庫等・収蔵庫において行われているが、すでに飽和状態となり資料化するまでに大へん困難な状況にある。これを打開するため昭和49年度の開拓補助事業として仮称埋蔵文化財調査センター

ターを建設することになったものである。

事業の経過	
昭和47年6月	文化財保護審議会より高槻市立仮称郷土資料館建設設計由書審中
昭和49年3月	地丁埋蔵文化財調査センター建設事業（国庫補助事業）の第1号に高槻市内定
昭和49年5月	仮称埋蔵文化財調査センター建設予算議決
昭和49年7月	仮称埋蔵文化財調査センター建設準備委員会設置
昭和49年8月	株式会社丹倉建築設計事務所を設計を委託
昭和49年1月	株式会社大田博地共同企業体に建設の工事請負
昭和50年2月	着工（昭和50年9月30日竣工予定）

高槻市立仮称埋蔵文化財調査センター平面図



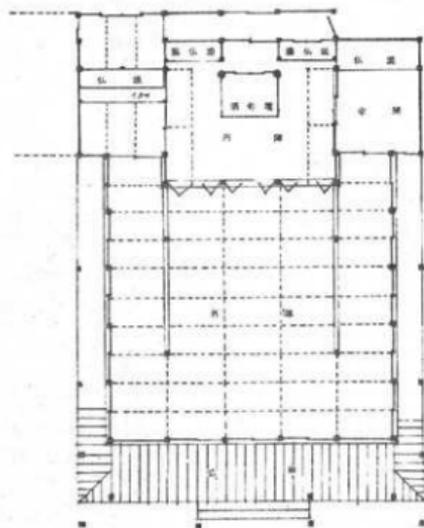
各部別面積	
1F (1) 特別収蔵室	216㎡
(2) 収蔵室	502㎡
(3) 発掘機具庫	16㎡
(4) 機械室	46㎡
(5) 管理室	36㎡
(6) ・・・	52㎡
(7) その他	48㎡
合計	786㎡
2F (1) 保存処置室	54㎡
(2) 暗室	16㎡
(3) 準備室	18㎡
(4) 写真室	54㎡
(5) 図面複製機設置	36㎡
(6) 研究室	72㎡
(7) 収蔵室	114㎡
(8) 整理室	32㎡
(9) 書庫記録収納	58㎡
00 会議室	24㎡
01 事務室	48㎡
02 ロビー	86㎡
03 その他	112㎡
合計	756㎡

高槻市文化財一覧

種 別	件 名	所在地	管理者	指定年月日
〔国指定〕				
国 宝	金剛石川作足基跡			
重 要 文 化 財	付木根残(銅釘付)一括	真上町	田中伊久	S.27.3.29
	木造 聖観音立像 二軀	原	神峯山寺	S.25.8.29
	" 阿弥陀如来坐像	"	"	"
	" 聖観音立像	"	本山寺	"
	" 毘沙門天立像	"	"	"
	" 千手観音坐像	浦堂本町	安良寺	S.49.6.8
旧法による重要美術品	絹本着色 桜花図 石鏡草	城北町	橋本末吉	S.38.7.1
	石造 灯籠	天神町	上宮天満宮	S.17.5.30
	史 跡	今城塚古墳	郡家新町	高槻市
"	輪上郡新坊野寺跡	清福寺町	"	S.46.5.27
"	石川作足基	真上町	国	"
〔府指定〕				
史 跡	高槻城跡	城内町他	高槻市	S.25.5.1
"	高山右近高槻天主教会堂跡	野見町	"	S.25.5.9
"	西園街道芥川一里塚	芥川町	芥川東部落会	S.16.5.14
名 勝	旗津峽	原・塚脇	高槻市	S.13.5.11
"	普門寺庭園	富田町	普門寺	S.46.3.31
有 形 文 化 財	普門寺方丈	"	"	"
"	教宗寺の石壇	芥川町	教宗寺	S.49.3.29
"	八坂神社の石壇	原	八坂神社	"
〔市指定〕				
有 形 文 化 財	笹井家住宅	解体保管中	高槻市	S.47.9.12
"	本山寺文書 2巻	原	本山寺	S.49.3.30
"	天川水鏡(高山帳) 2冊	東天川	森田亮吉	"
"	兼間家文書 3巻	柱本町	兼間正造	"
"	成合春日神社雨乞祭具一式	成合町	春日神社	"



a. 清福寺太子堂



b. 正徳寺本堂現状略平面図

妙樂寺・神宮寺



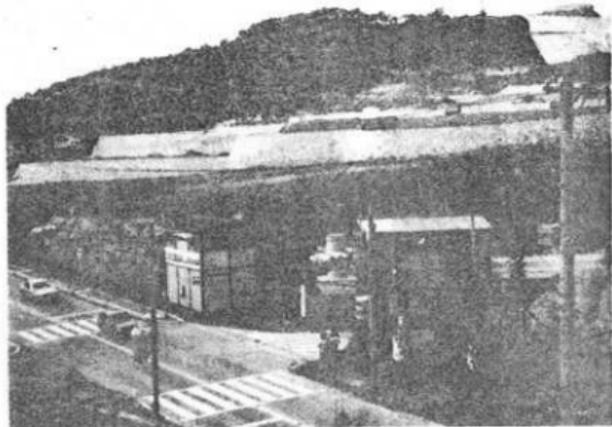
a. 木造十一面観音立像（妙樂寺）



b. 木造大日如来坐像（神宮寺）

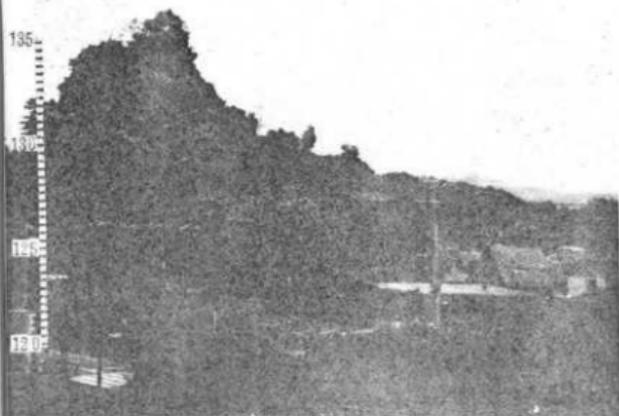
A

原峠附近(北東側から)
(道路面海拔120m)



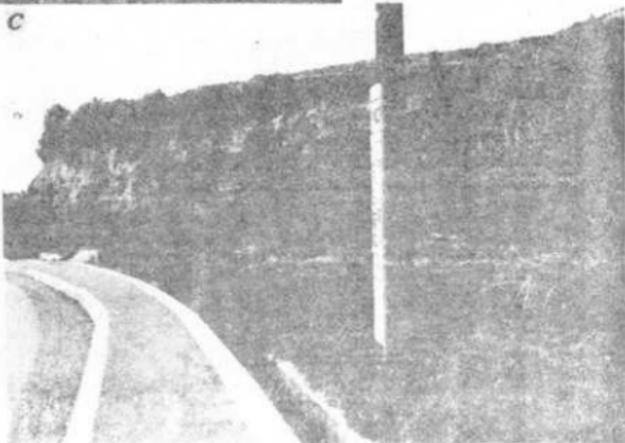
B

原峠北東側の化石層(南西側から)
(化石層は海拔120~185m 厚さ約15m)



C

原峠、バス停留所西側の化石層
(北側から)

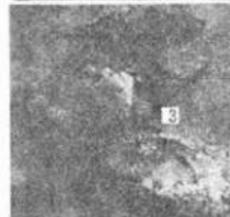
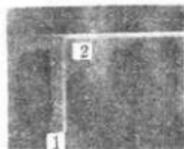




原峠の化石層
(海拔115~126m
厚さ6m)

原峠の化石層
(海拔120~123m
厚さ3.5m)

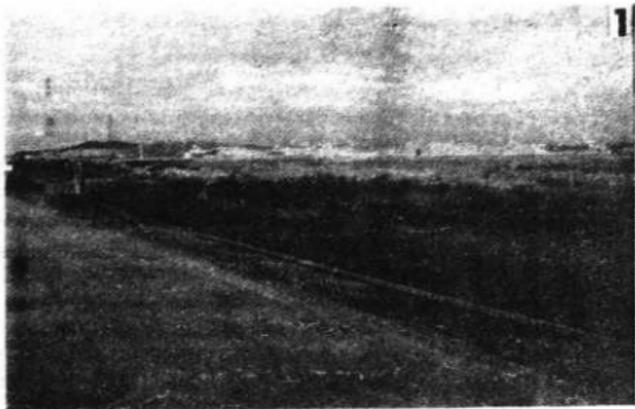
原峠化石層より出
土した化石の一部
(1~13)



(1) コブツガイ, (2) オトメガサ, (3) カモメガイ, (4) ナミワガシワ, (5) マカキ, (6) スミノエガキ, (7) イワガキ
(8) ハイガイ, (9) ケンカコモリ, (10) ウスツガイ, (11) コナ(蟹), (12) ニウセキ(マナヅメ(投石)), (13) アカマツ(材片)

1

淀川西岸より上流を望む



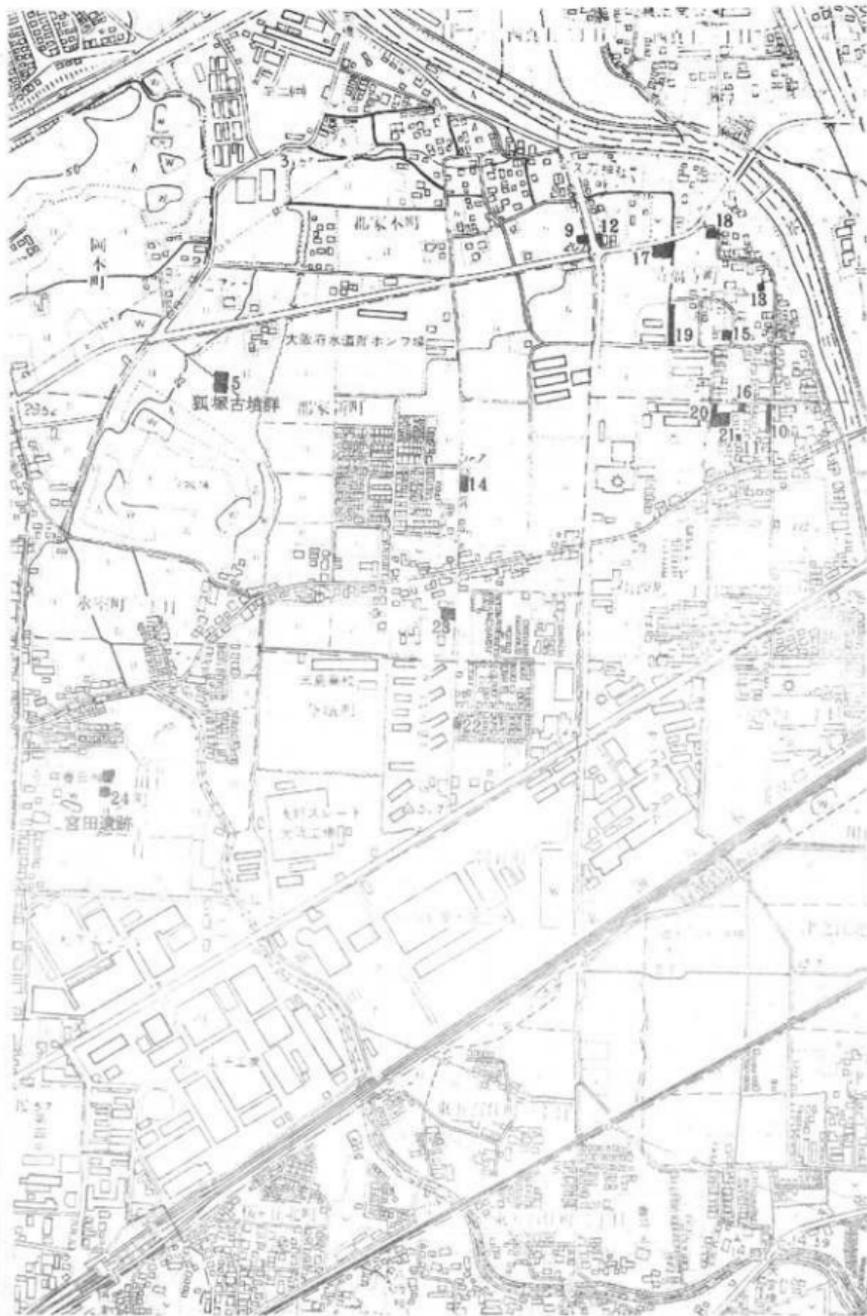
2

淀川西岸より下流を望む

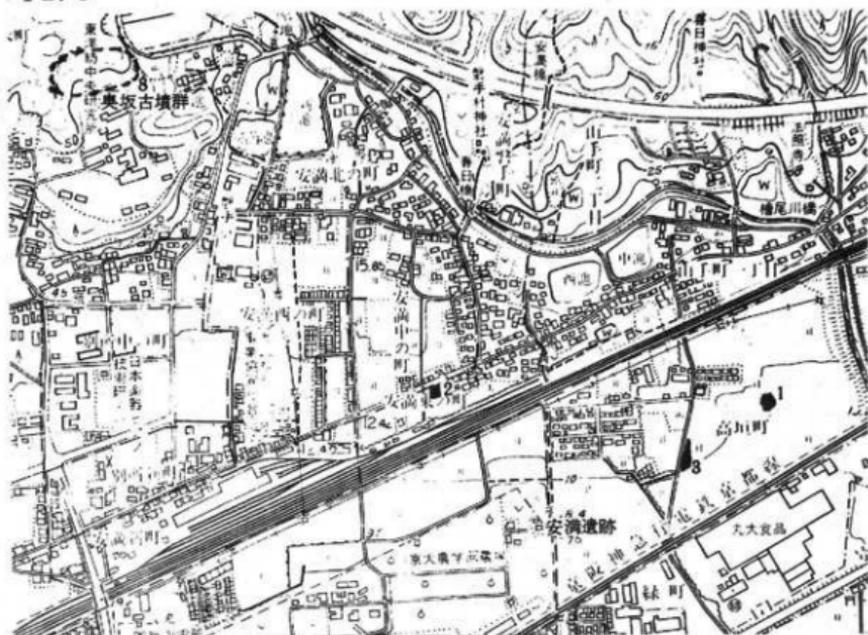


3

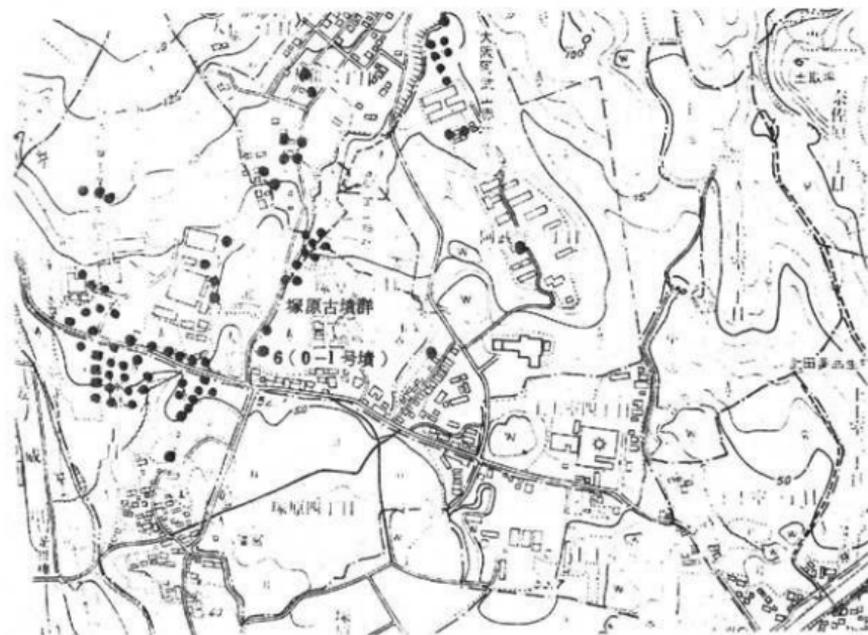
淀川河川敷内のヨシ類群生地(稲藪)(対岸は枚方市)



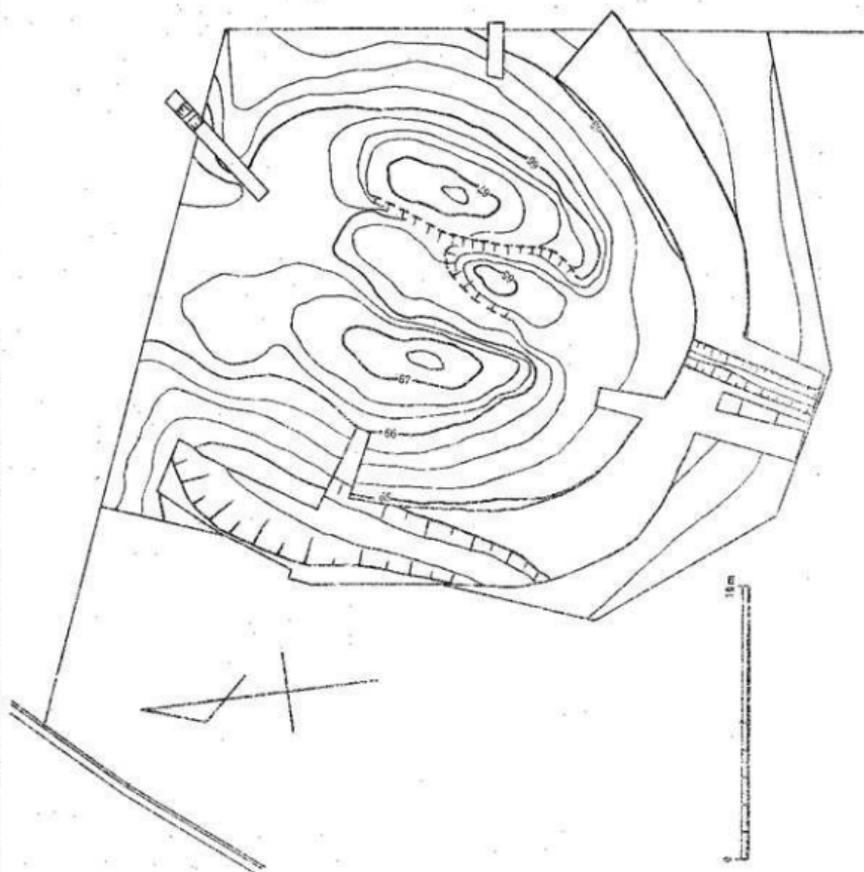
市内調査位置図



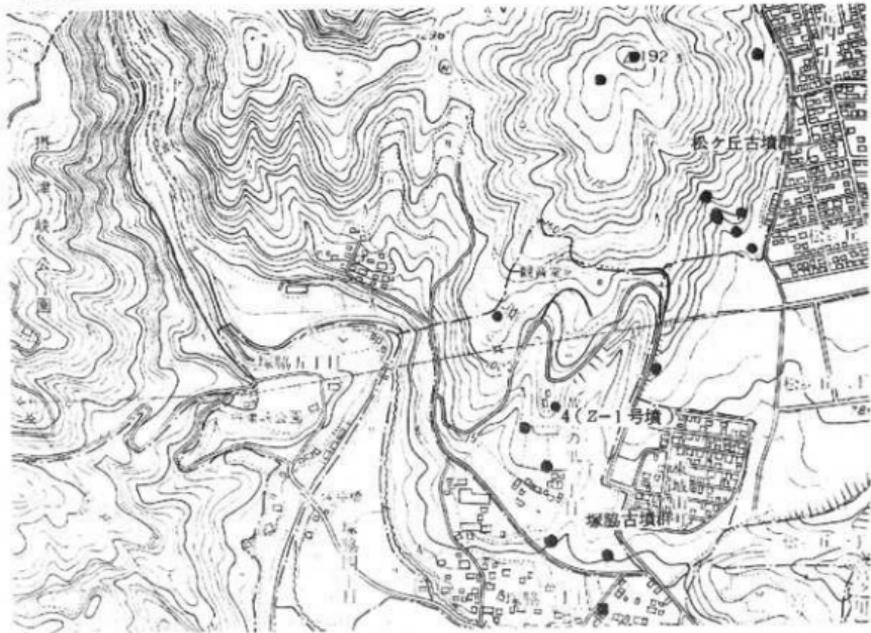
a. 安満遺跡・奥坂古墳群



b. 塚原古墳群



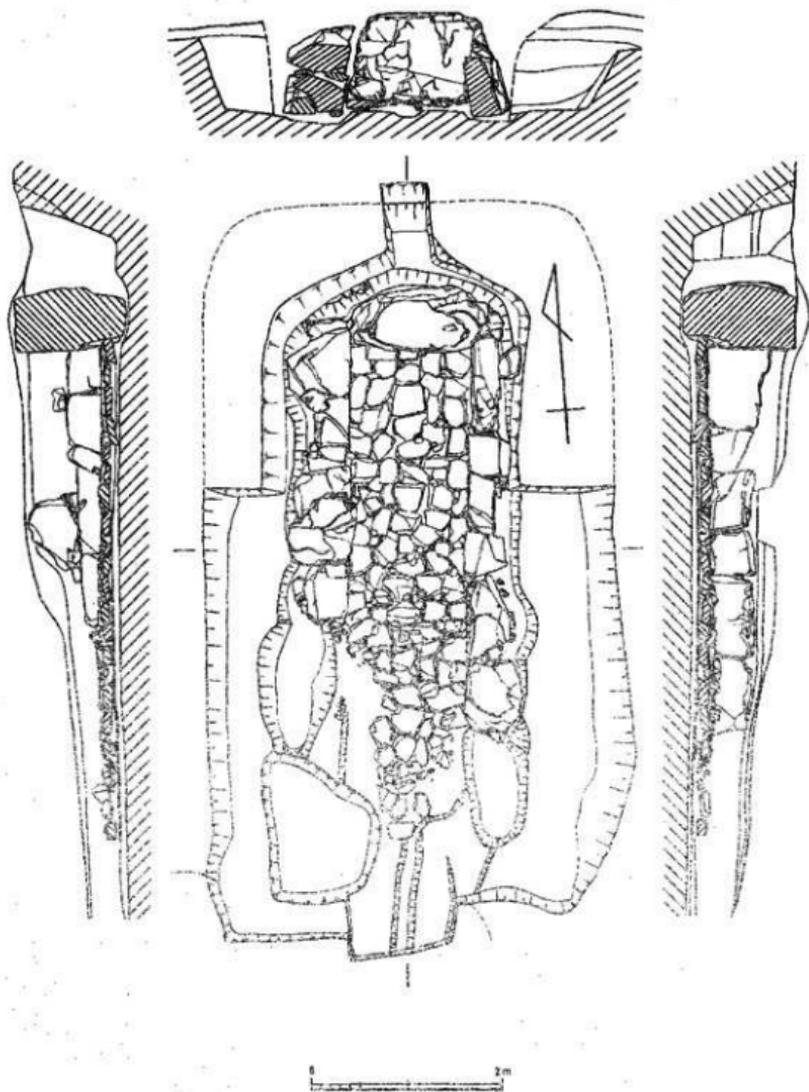
塚脇古墳群



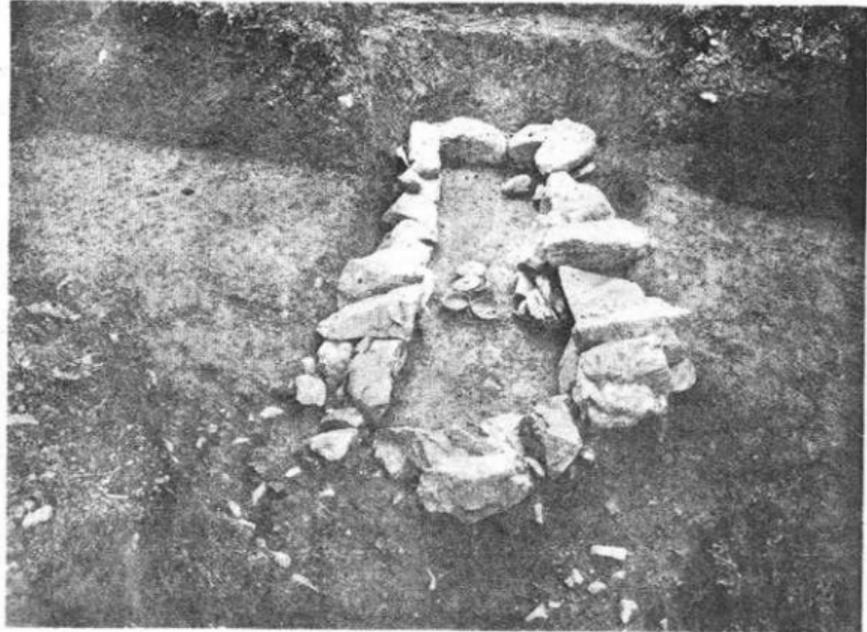
1. 位置図



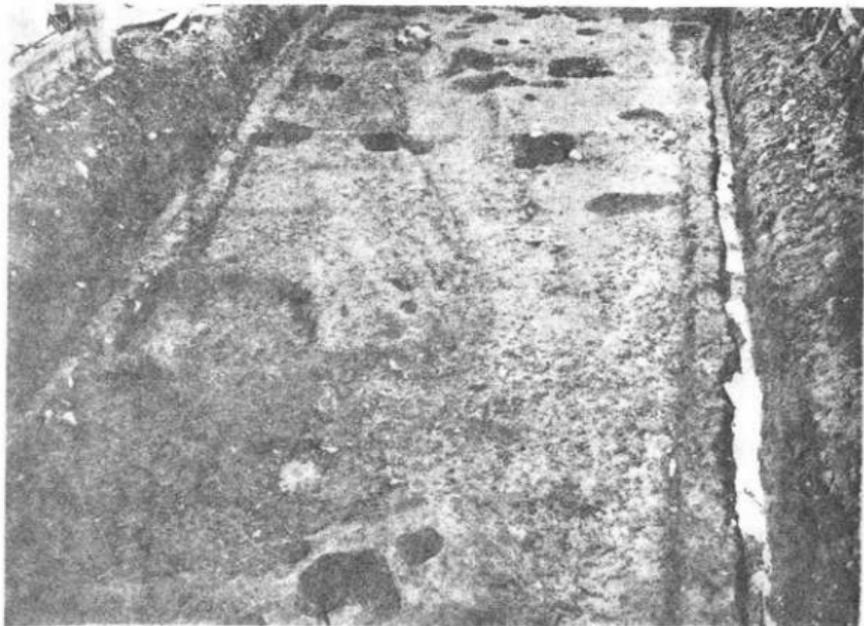
2. 塚脇2-4号墳の石積(正面から)



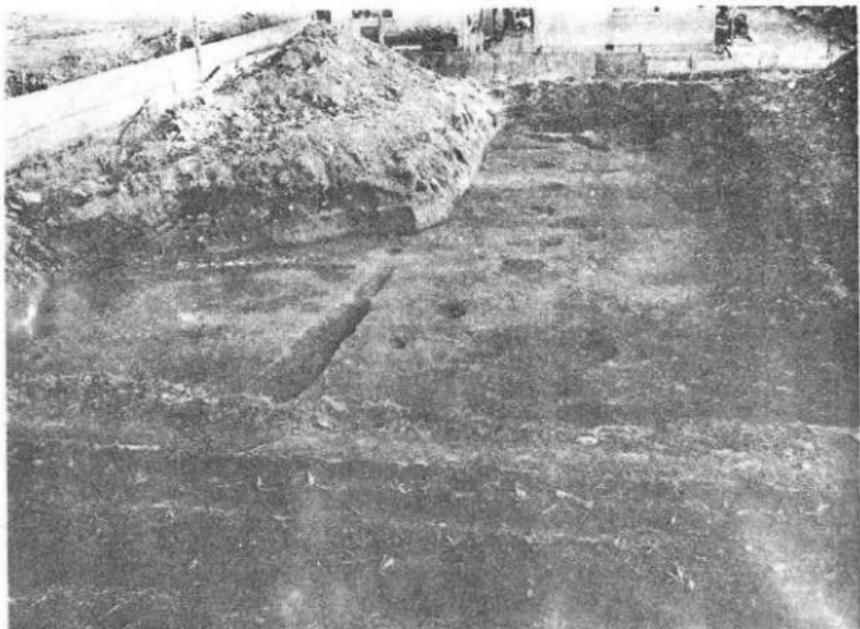
塚脇 2-1 号墳・石室実測図



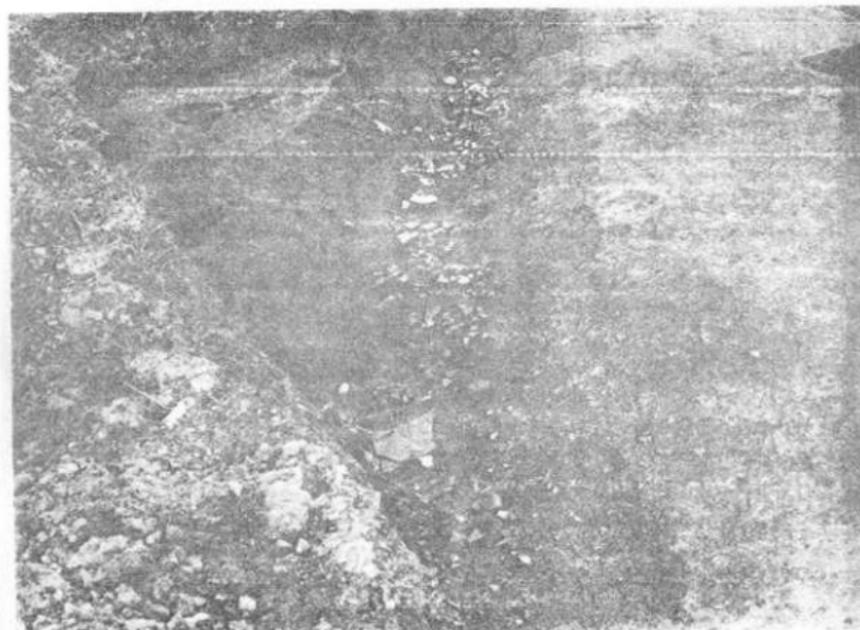
1. 奥坂A-5号墳の石室(正面から)



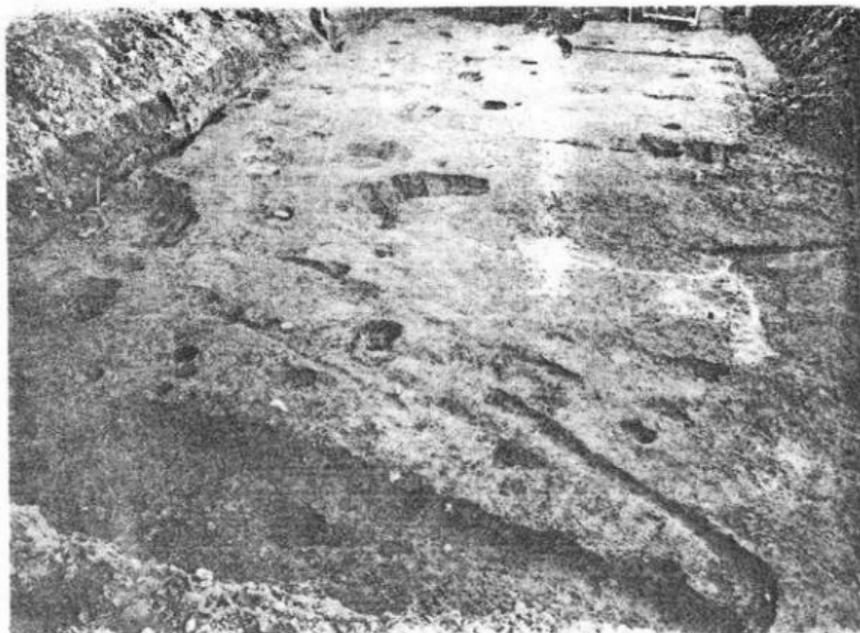
2. 奥坂古墳群(奥坂A-5号墳)の石室(側面から)



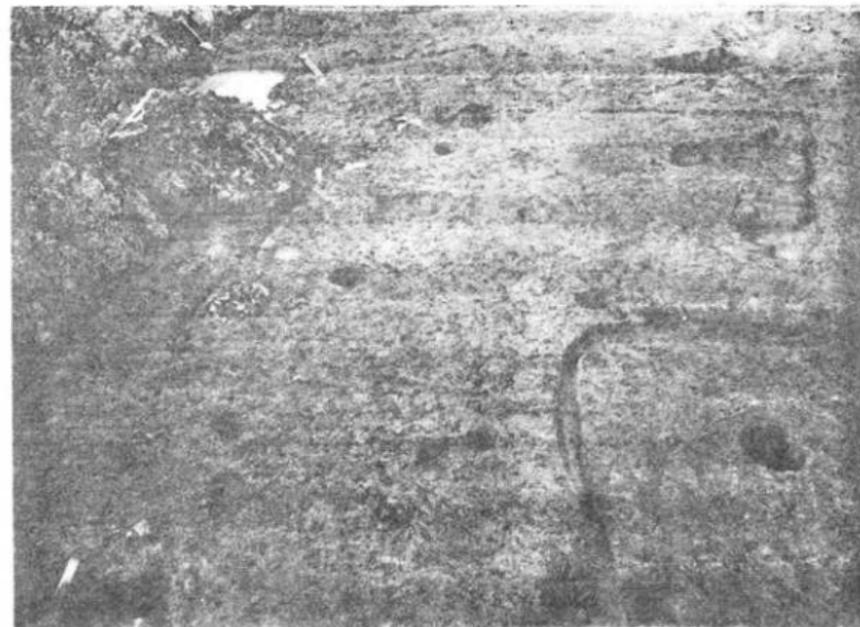
a. 溝と柱穴群（西側から）（埋-18）



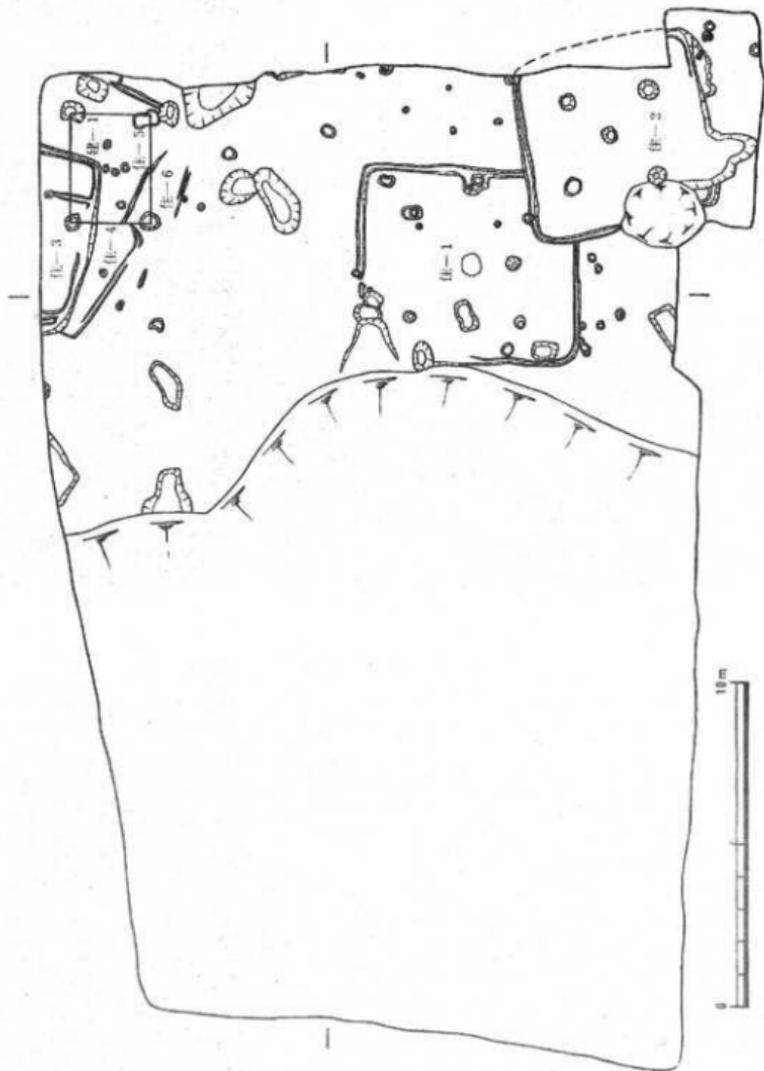
b. 古墳時代の溝（東側から）（埋-18）



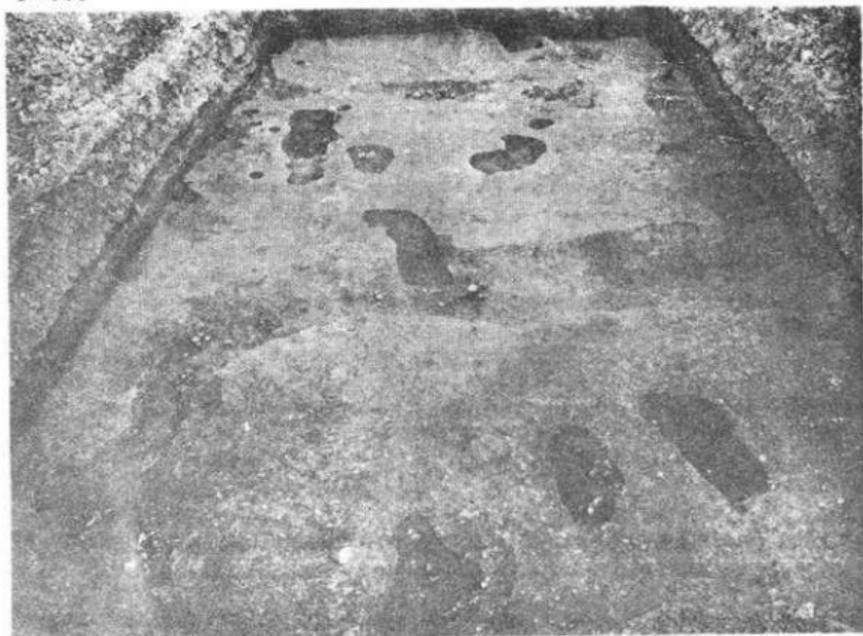
a. 竪穴式住居跡と土垣基（北側から）（埋-17）



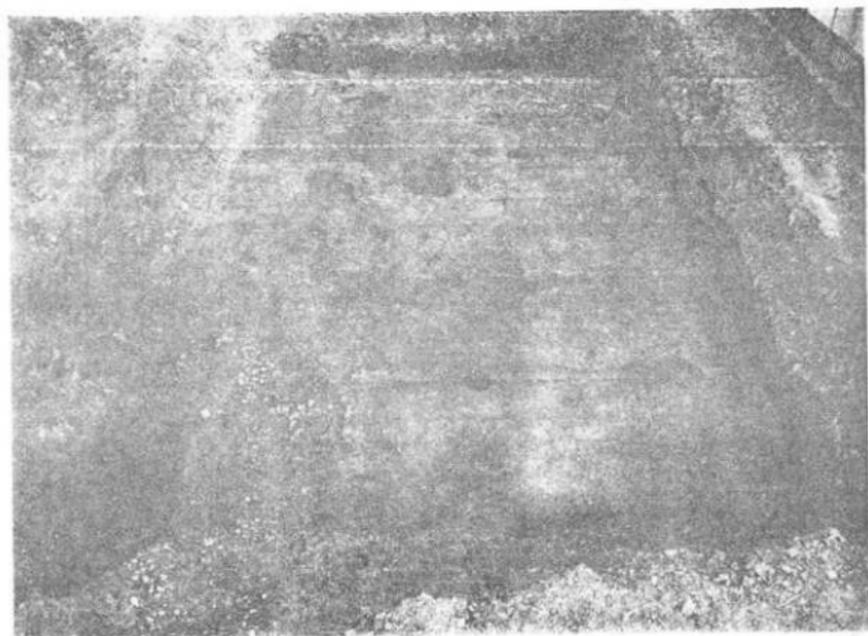
b. 1号・2号住居跡、東側から（埋-17）



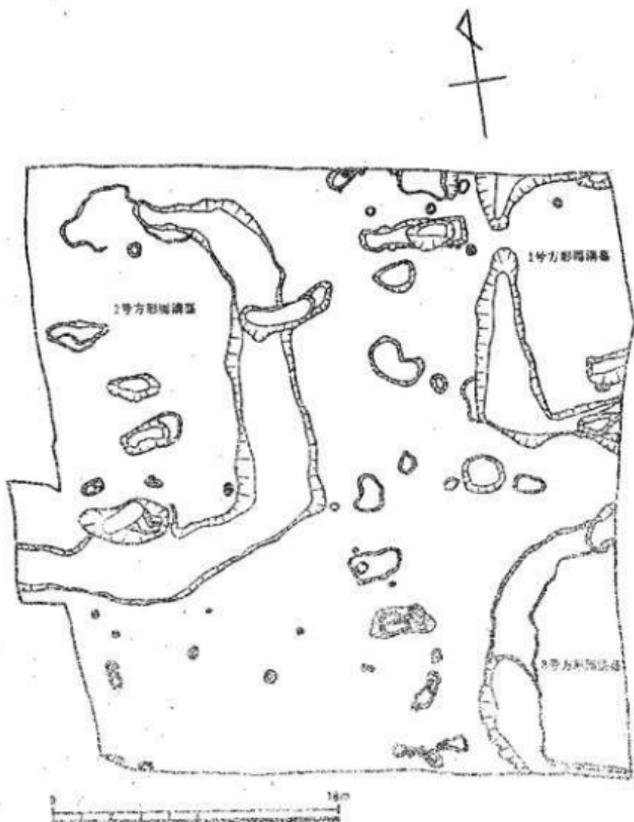
嶋上郡衙跡の遺構平面図（埋-17）



a. 方形周溝墓と土城墓(東側から)(埋-21)



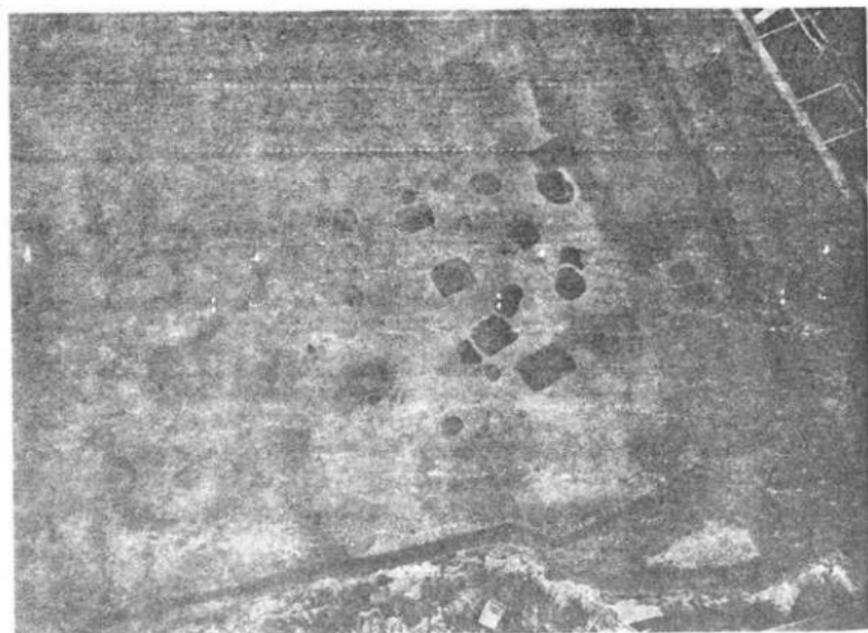
b. 方形周溝墓と土城墓(東側から)(埋-21)



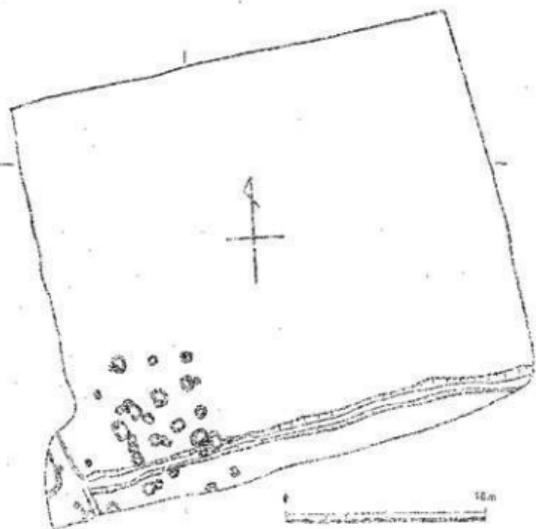
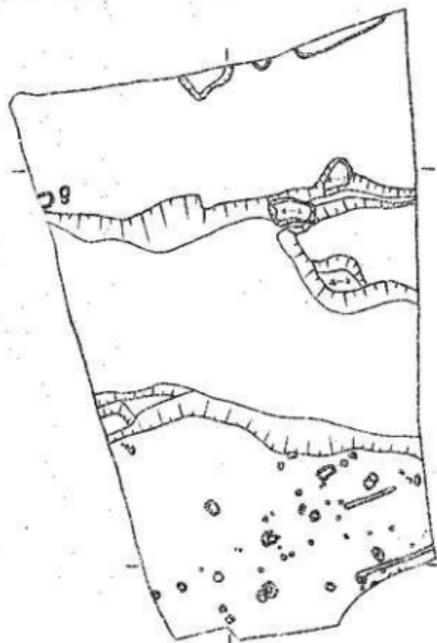
鳩上郡街跡の遺構平面図（抜-21）



a. 旧女瀬川と柱穴群〔北区〕（北側から）



b. 掘立柱建物跡〔南区〕（西側から）



宮田遺跡の遺跡平面図

天川遺跡



a. 位置圖



b. 遺跡全景(北側から)

昭和49年度 高槻市文化財年報

発行 高槻市教育委員会社会教育部社会教育課
大阪府高槻市桃園町2番1号

印刷 邦文社印刷